

僕のヒーローアカデミアの世界に来た

犬大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

優斗「いい加減にしろ」

目次

| | |
|-----|----|
| 第七話 | 81 |
| 第六話 | 67 |
| 第五話 | 59 |
| 第四話 | 33 |
| 第三話 | 21 |
| 第二話 | 9 |
| 第一話 | 1 |

第一話

また路地裏かい

悠「痛ってー、またかよ」

優菜「また女子・・・神様出てこんし」

悠「とりあえず・・・お前その服男にしか見えん」

？「おおおオオオオ!!!」

なんだ？この世界は化け物がいるのか？

通りに出て声の方を見ると・・・泥の塊みたいな奴が中学生みたいな奴にまわりついてる

もがいてるな、あんなやついんの？

野次馬の女「頑張れヒーローくく!!」

・・・ヒーローがいるのか

悠「俺たちの出る幕はなさそうだな」

でかい女ヒーロー「私二車線以上じゃなきや無理くくく!」

木のヒーロー「爆炎系は私の苦手とするところ・・・今回は他に譲つてやろう!」

水を出してるヒーロー「そりゃサンキュー消化で手いっぱいだよ!

状況どーなってるの!？」

ガタイのいいヒーロー「ベトベトでつかめねえし良い個性の人質が抵抗してもがいてる!おかげで地雷原だ三重で手エ出し辛え状況!!」

なんだよ助けられねえのか・・・

悠「個性ってなんだ？」

優菜「知るか」

「捕まってる中学生がこつちを泣きそうな目で見た

限界だ!誰も助けねえなら俺が行く

ダッ

悠も来た

そして同時にもう一人飛び出してきた

ガタイのいいヒーロー「バカヤロー!!生まれ!!生まれ!!」

捕まっている中学生「デク・・・」小声

優菜「何してんだ!？」

デク? 「わからない! 考えるより体が先に!!」

悠「おおくよく聞くやつだな」

優菜「アイツの動きを止めれば助けてやるよ、できるか?」

デク? 「わかった!」

デクが背負っていたリユックを化け物にぶつけた

化け物「ぬゝっ」

優菜「よくやった! クロノス、ザ・ワールド」

俺と悠以外の時間を止めた

悠「引っ張り出すか」

掴まっている中学生を引っ張り出した

優菜「こいつはさっきの奴の所に」

時間が動き出す

捕まっていた中学生「は?」

優菜「デクって言われてたな? 早く連れて行って逃げな!」

デク「う、うん! 行こうかつちゃん!」

かつちゃん「はああ?」

ガタイのいいヒーロー「俺たちも行くぞ!」

化け物「邪魔しやがって!! ぶっ殺す!!」

悠「お前さくそれも個性つてやつなんだろ? こんなことして何か利

益があるのかよ」

化け物「黙れ!」

こいつはダメだな

優菜「やるぞ、悠」

悠「了く解」

優菜「クロノス、カオス」

悠「イフリート」

化け物「絶対にぶっ殺してやる!」

優菜「地獄でやってろ」

オラオラオラオラオラオラオラ

化け物「俺に打撃が聞くとおっしゃってんのか!? これで終いだア!!」

ガタイのいいヒーロー「お前たちは戻れ！あとは俺たちヒーローに・・・」

優菜「ただの泥が塊になって動けるはずがねえ・・・スライムだってそうだ・・・ド○○エとかじや雑魚扱いされてるが・・・本物に打撃が効くはずがねえ・・・ならどこかに動かしている核があるはずだよなア」

化け物「・・・まさか!？」

優菜「今のラツシユで見えたぞ、お前の核が!」

化け物「や、やめろーツ!!」

優菜「アリエル、指弾」

パン

グチャアアアア

死んだか

何だあいつ・・・

相当強かったぞ

新しいヒーローか？

・・・目立ちすぎたか

優菜「それじゃ」

デク「ま、待ってよ」

優菜「はあ、なんだ？」

デク「貴方新しいヒーローですか？だったら名前を・・・」

優菜「ヒーローじゃないし、まだ成人してねえよ」

デク「え？」

どこ○○ドアゝ

優菜「悠、行くぞ」

近くのビルの屋上

神様「大丈夫だったかのう」

優菜「今頃かよ」

神様「まあまあ、住む家とか雄英高校の試験受ける紙も出してきたんじゃないぞ。筆記試験は、本を家に置いてあるぞ。場所は地図アプリに送っておいたぞい、A組の人数も二人分増やしておいた。B組もの」
優菜「ここね・・・じゃあ勉強するか、悠お前もだぞ」

悠「そんな〜」

どこ〇〇ドアで帰った

試験当日

優菜「ここか・・・」

悠「地味に試験って初めてだ」

優菜「あく初めての試験は私の中にいたから・・・」

悠「というか、二人の時ぐらい俺にしたらどうなんだ?」

デク「間に合った・・・」

優菜「ん?」

デク「え?」

優菜「お前確か・・・」

デク「あの時の!」

優菜「そうだよな?デクだったか・・・」

デク「本名じゃないんだけどね」

優菜「何だ、あだ名か。じゃあ本名は?」

デク「緑谷出久って言うんだ」

優菜「まあ、デクのほうが呼びやすいか。行くぞ」

ガクガク

優菜「・・・足・・・震えてるぞ」

デク「だ、大丈夫・・・」

ガッ

優菜「あ」

足引つ掛けた

・・・あれ?浮いてるな

女の子「大丈夫?」

デク「わっえ!?!」

女の子「私の個性ごめんね勝手に、でも転んじやったら演技悪いも
んね。緊張するよねえ」

デク「へ・・・あ・・・えと・・・」

女の子「お互い頑張ろう」

歩いていった

優菜「・・・とりあえず行こうや」

デク「う、うん」

説明を受け

会場

悠も知り合いはいないっぽいな

見覚えもない・・・ということはA組のやつはいないのか
なら本気でやるか

『はいスタート』

優菜「クロノス、ザ・ワールド」

全部ぶっ壊した

そして時は動き出す

ダダダダダダ

あ、あれ？どこにもいないぞ!?

どうなってんだ？欠片みたいなのはいっぱい散らばってるが・

『え!?!一つもないの!?!ちよつとまつとけよ!?!』

先生が来た

先生「何してんだ？お前、ずっとここにいたのか？」

優菜「だって全部壊したから」

先生「・・・今なんつった？」

優菜「始まった瞬間全部壊したZE☆」

先生「マジかよ！お前！」

先生が報告に戻っていった

ドオオオオン

0ポイントのやつか・・・あれ？残ってないのにアイツだけでたの

？

報告する前に出たのか

男「誰か・・・助けてくれ・・・」

アイツ、今出てきた時の瓦礫に足つぶされたか

オイオイ、他のやつ逃げてんじやねえよ

仕方ねえ

シユタタタタタ

優菜「大丈夫か？」

男「すまねえ・・・」

ゴゴゴゴゴ

男「おい、来るぞ！」

優菜「・・・仕方ねえな、カオス。ここに穴作ってアイツの前でつかく穴作って空間歪ませて入った奴がでかくなるようになるよ」

男「お前・・・何言ってるんだ？」

優菜「お前の足はあとで治してやるよ」

ブウン

繋がったな

コオオオオ

優菜「オーバードライブウウウ!!」

ドツゴオオオオオ

男「0ポイントが吹っ飛んで行った!？」

優菜「よし、治してやるよ」

? 「クソがッ！」

ナイフが飛んできた

避けて飛んできた方を見た

優菜「どうした？」

ガタイのいい男「お前のせいで!!お前のせいで俺たちは合格するのが完全にできなくなっちゃった!!どうしてくれる!!」

優菜「・・・これはどこから持ってきた？」

ガタイのいい男「俺の個性は金属を思い通りに金属製のものにできる個性だ」

優菜「ふくん」

メタリカみたいなものか

優菜「で、お前は今ぶちぎれてんだよな？」

ガタイのいい男「そうだ！」

優菜「じゃあ寝とけ」

デコピンをした

ゴッ

デコピンの音じゃない？俺もそう思う
シユウウウウウウ

優菜「よし、治すぞ」

ガタイのいい男「あんた一体・・・」

優菜「ん？そうだなあ・・・一番人間離れた人間・・・かな？」

ガタイのいい男「ハッ！そうかそうかそりや勝てるわけないわ、お前なら雄英トップになれそうだな！これはさっさと諦めたほうがよさそうだ」

優菜「・・・よし、治ったぞ」

ガタイのいい男「おお！前より足が軽いぞ！ありがとな！これなら足使う職についてもよさそうだ」

優菜「・・・お前、足に何かあったんじゃないか？」

ガタイのいい男「・・・よくわかったな、末期ガンだとき。だから無理言つてこの試験を受けたんだ、まあ結果はこの通りだが・・・」

優菜「お前・・・合格してたらどうするつもりだった」

ガタイのいい男「さあな、だが俺が受かるわけがないことは分かっていたさ。もう残り少ない命だと思っていたが・・・お前が治しちまった」

優菜「ん？末期ガンは動けないとか聞いたんだが・・・」

ガタイのいい男「それはおれにもわからんが、俺の個性は跳躍力が強くなる個性だからか、個性を使ったら小走りぐらいはできるようになった」

優菜「末期ガンつてことはほかのどこにも転移してるのか？」

ガタイのいい男「ああ、医者もお手あげだと」

優菜「そうか、じゃあアリエル、カデンツァ」

ガタイのいい男「何してんだ？」

優菜「帰ったら、MRI撮ってみろ」

ガタイのいい男「？ああ」

先生『終了く!!!』

キーン

優菜「うっさ」

ガタイのいい男「じゃあまたどこかであつたらな」
優菜「ああ」
その後悠と合流し結果待ち

第二話

悠「おくい」

優菜「どうした?」

悠「届いてるぞ、結果」

優菜「・・・お前あっさりしすぎじゃね?」

悠「見るの?見ないの?」

優菜「見る」

封筒を開け投影機?みたいなものが出てきて

変なおっさんが投影された

悠「誰?」

優菜「資料で見たぞ、平和の象徴オールマイトだよ。確かNO. 1

ヒーロー」

悠「マジかよ」

オールマイト「今回は君達の試験結果を言うよ、まず悠君、君はぎりぎりだがA組には入れたよ!ハハハハ!!よくやった!そして優菜君!君の成績はすごいね!まさか、あれ全部壊しちゃうなんて、みんな驚いてたよ。この私でも一瞬で全部っていうのは流石に骨が折れるからね!誇りに思っているよ!」

悠「時間止めた?」

優菜「当たり前じゃん」

オールマイト「来たら是非君の個性を詳しく教えてくれよ!というわけで二人とも合格!」

よっしやーッ

オールマイト「ああ、それと」

優菜「ん?」

オールマイト「君達、兄妹なんだってね。しかも二人暮らしで・・・今どきの子供はませてるからねえ、兄妹でいかがわしいことする人もいなくもないんだよ。もしやってたら・・・おじさん怒るからね!え?そういうのは言っちゃダメ?あくやっぱり今のなしで」

優菜「やるかバカ!」

悠「え？やらねえの？」

優菜「本気にするなバカ！」

というわけで学校・・・の前に

登校中

母親「誰か！助けて」

子供「うわくんママ〜!!」

ヴィラン「へっへっへこのまま捻りつっ」

ザシユ

波紋を流した葉っぱで腕を切った

優菜「今、登校中なんだよ!!出てくんなよ登校中に!!」

MT・レデイ「ちよつと!ここはプロのヒーローに・・・」

悠「アイツ言つても聞かないんで無駄ですよ・・・」

優菜「今急いでるから速攻で終わらすぞ」

ヴィラン「なんだt」

優菜「指弾」

パン

ドサツ

優菜「よし悠行くぞ!!あと三十分しかねえ!!」

悠「てか三十分って早くねえか?・・・まあいいや考えるのダルイ」

優菜「あんたプロだろ!後始末頼んだ!!」

シユタタタ

MT・レデイ「た、台風みたいね・・・」

ヴィラン「うおおおお!!」

優菜「指弾」

パン

ドサツ

優菜「あれも頼む!!」

MT・レデイ「貴方大人なめてるわよね!」

やつと学校

優菜「スカートついていつまでたつても慣れない」

悠「ジヨナサンだったけ?あんどきもスカートじゃなかった?」

優菜「うるせえ！」

出久「あつた・・ドアでか」

優菜「あつデク！」

出久「あつ優菜さん！悠君！二人もA組になれたんですね！」

悠「じゃあ、皆で入る？」

出久「あつはい」

入ると

眼鏡「机に脚をかけるな！雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないか!？」

かつちゃん「思わねーよてめーどこ中だよ端役が！」

優菜「なんかうるさいと思つたら、お前ちよつと前に助けてやった奴じゃねえか。そつちの金髪」

かつちゃん「あ?・・・あゝてめえは！」

ダッ

向かってきた

かつちゃん「ぶつ殺す！」

避けた

優菜「おいおい、恩を仇で返すのかお前は」
!!

優菜「悠、来い！」

悠「は?」

引つ張って離れた

ボン

かつちゃん「避けてんじやねえぞモブがあ!!」

優菜「本気でやっていい訳?」

眼鏡「君たちやめないか！」

かつちゃん&優菜「黙つてろ」

眼鏡「な!？」

かつちゃん「死ねええ!!」

優菜「クロノス、ザ・ワールド」

腹パン10発

優菜「そして時は動き出す」

ドン

かっちゃん「ぐっ」

ドガア

女の子「うわっ！なに!!」

かっちゃん「クソがッ」

シユタツ

近づいた

優菜「いい加減にしろよ？出ないと本気出せねえとなくなるから」

かっちゃん「くっそ・・・」

優菜「やめるんなら、それ全部治してやるよ」

かっちゃん「ああ、くそ。やめりやあいんだろやめりや」

優菜「よし、アリエル頼む」

パアア

かっちゃん「あ？治・・・った？」

優菜「もういいよな？」

女の子「え？どういう状況？」

出久「あれ？君って確か」

女の子「あ！そのモサモサ頭は!!地味めの!!プレゼントマイクの言っただ通り受かったんだね!!そりやそうだ!!パンチ凄かったもん!!」

出久「いや！あのっ・・・！本っ当あなたの直談判のおかげで・・・

ぼくは・・・その・・・」

女の子「へ？何で知ってるの？」

出久「くくく・・・」

優菜「いや、先生来てないし自己紹介しようよ」

麗日「それもそうやね、私は麗日お茶子です！」

飯田「ボ・・・俺は私立聡明中学出身飯田天哉だ」

優菜「あ、さっき私のせいで言えなかったから・・・」

悠「俺たちは、俺が悠でこっちが優菜だ。俺が兄だからな」

優菜「そこ毎回言うの？」

？「お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

声のした方を向くと・・・寝袋来てる人がいた

先生？「ここは・・・ヒーロー科だぞ」

皆の心の声「なんか!!!いるうう!!!」

寝袋から出てきた・・・

先生？「ハイ静かになるまで八秒かかりました時間は有限君たちは合理性に欠くね」

出久「てことは・・・この人もプロのヒーロー・・・？」

相澤「担任の相沢消太だ、よろしくね」

寝袋からなんか出してる・・・

相澤「早速だが体操服着てグラウンドに出ろ」
グラウンド

出久「個性把握・・・テストオ!!」

麗日「入学式!?ガイダンスは!?!」

相澤「ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ」

麗日「・・・!?!」

相澤「雄英は自由な校風が売り文句、そしてそれは先生側もしかり」
・・・?」

相澤「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50M走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈、中学のころからやってるだろ？個性禁止の体力テスト、国は未だ画一的な記録をとって平均作り続けている合理的じゃない。まあ文部科学省の怠慢だよ、爆豪、中学の時ソフトボール投げ何Mだった」

爆豪「67M」

相澤「じゃあ個性を使ってやってみろ円から出なきや何してもいい早よ、思いつきりな」

爆豪「んじゃまあ・・・死ねえ!!!」

・・・死ね？

悠「めちやくちやとんだな・・・」

優菜「あんなのできると思う？」

悠「無理だろ」

優菜「お前、私の中にいたんだ。だったら、私と同じように使えるだろ」

悠「それもそうか」

優菜「私と同じようにやればいい」

・・・?

優菜「あれ？じゃあお前、身体能力だけで合格したの？」

悠「そうだが」

優菜「すげえなお前」

相澤「まず自分の「最大限」を知る、それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

705・2M

男の子1「なんだこれ!!すげー面白そう!」

男の子2「705Mってマジかよ」

女の子「個性思いつきり使えるんだ!!さすがヒーロー科!!」

相澤「・・・面白そう・・・か、ヒーローになるための三年間、そんな腹つもりで過ごす気にいるのかい?よし、トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し除籍処分としよう」

皆「はあああ!」

相澤「生徒の如何は先生の自由、ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ」

麗日「最下位除籍って・・・!入学初日なんですよ!?!いや初日じゃなくても・・・理不尽すぎる!!」

優菜「お茶子・・・お前、社会なめてるだろ」

麗日「え?」

優菜「ブラック企業はホントにヤバいぞ、長時間労働、休日がほとんどなく残業代すら出ない、有休もない、元の給料も低い、パワハラセクハラなんて日常、休もうとしたら根性で来いって言われるんだぜ?世の中でたら理不尽何てしよつてy」

悠「当て身」

ドカッ

優菜「グフツ」

ドサツ

悠「ごめんな、暴走しちまったばいわ」

麗日「え？う、うん」

相澤「気絶しちまつてるが：：優菜の言ったとおりだ、自然災害：大事故：：身勝手なヴィラン達：：いっどこから来るかわからない厄災、日本は理不尽にまみれてる。そういうピンチを覆していくのがヒーロー：：放課後マツクで談笑したかったならお生憎、これから三年間雄英は全力で君たちに苦難を与え続ける、PIUS ULTOR Aさ。全力で乗り越えて来い、さてデモンストレーションは終わり、こっからが本番だ」

悠「起きろー」

パパパパパパパン

往復ビンタ中

優菜「ブツ・ハツ！」

悠「おー起きたか」

優菜「あれ？倒れる寸前の記憶がないんだけど」

悠「あく大丈夫なんともないってさ」

優菜「そっか、今から測るのか？」

悠「ああ」

優菜「よし、行くぞ」

第一種目：50M走

機械「ヨイ・・」

優菜「カオス」

機械「スタート！」

優菜「ホール」

※どこ○○ドア

ブウン

ピピッ

機械「0秒91！」

麗日「速っ！」

優菜「こうすりやいい」

悠「おお！お前頭の回転速いんだな」

悠 0秒95

第二種目：握力

優菜「ほっ！」

グググ

ピピッ

60 kg

女子の握力じゃねえ！

悠「ん！」

グググ

70 kg

悠「さすがにこれは俺が勝ったな！」

瀬呂「540キロて!!あんたゴリラ!?タコか!!」

峰田「タコってエロいよね・・・」

優菜「あれは、人間の域を超えてる」

悠「間違いない」

第三種目：立ち幅跳び

カオスの力でとりあえず

優菜 20 M

悠 20 M

第四種目：反復横跳び

普通にやって

優菜 120回

悠 120回

第五種目：ボール投げ

麗日「せい！」

ピピッ

上鳴「∞!!!?すげえ!!∞が出たぞー!!!」

優菜「次はデクか」

飯田「緑谷君このままだとマズいぞ・・・?」

爆豪「つたりめーだ無個性の雑魚だぞ！」

飯田「無個性!?!彼が入試時に何を成したか知らんのか!？」

爆豪「は?」

投げた!

46M

出久「な．．．今確かに使おうって．．．」

相澤「個性を消した．．．つくづくあの入試は．．．合理性に欠くよ
お前のような奴も入学できてしまう」

出久「消した．．．!!あのゴークル．．．そうか．．．!抹消ヒーローイ
レーザーヘッド!!!」

佐藤「イレーザー?俺．．．知らない」

芦戸「名前だけは見たことある!アングラ系ヒーローだよ!」

相澤「見たとこ．．．個性を制御できないんだろ?また行動不能になっ
て、誰かに助けてもらおうつもりだったか?」

出久「そっそんなつもりじゃ．．．!」

相澤「どういうつもりでもいい周りはそうせざるを得なくなるって
話だ、昔暑苦しいヒーローが大災害あ一人で千人以上を救い出すとい
う伝説を作った、同じ蛮勇でも．．．お前のは一人を助けて木偶の棒に
なるだけ、緑谷出久、お前の力じゃヒーローにはなれないよ．．．個
性は戻した．．．ボール投げは二回だどつとと済ませな」

あれ?先生目薬してんな．．．授業中に?

青山「彼が心配?僕はね．．．全っ然」

麗日「ダレキミ」

飯田「指導を受けていたようだが」

爆豪「除籍宣告だろ」

悠「投げるぞ」

相澤「見込み．．．ゼロ．．．」

なんか小声で言ってるな

出久「今、SMASH!!!」

ピピッ

出久「あの痛み．．．程じゃない!!」

705・3M

出久「先生……！まだ……動けません」

相澤「こいつ……！」

麗日「やっとヒーローらしい記録出したよー」

飯田「指が腫れ上がっているぞ入試の件といい……おかしな個性だ……」

青山「スマートじゃないよね」

ボボボ

爆豪「どーいうことだこらワケを言えデクてめえ!!」

出久「うわああ!!」

優菜「おい！」

すると布みたいなもの引つ張られた

爆豪「んぐえ!!ぐつ……んだこの布固つ……!!」

相澤「炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ「捕縛武器」だ、つたく何度も個性を使わずなよ……俺はドライアイなんだ」

皆の心の声「個性すごいのもつたいたい!!」

ああ……だから目薬刺してたのか

相澤「時間がもつたいたい次準備しろ」

麗日「指大丈夫？」

出久「あ……うん……」

ガッ

腕を掴む

優菜「お前これ……折れてるだろ」

出久「え!いや……その……」

優菜「治してやるからちよつと来い」

グイ

出久「え!ちよつと」

皆から見えないところ

優菜「あれ?何でオールマイイトいの?」

オールマイイト「いや……ちよつと気になってね!」

優菜「デクが?」

出久「!」

優菜「似てるよな?個性が・・・二人ともスマツシユって言って個性使うしね」

出久「いや、別に何も」

優菜「まあ別にいいけど、指出せ」

やっぱり折れてる

優菜「個性見たいって言ってたよな?」

オールマイト「あ、ああ」

優菜「アリエル」

アリエル「はい?」

出久「え!?!」

オールマイト「常闇くんのダークシャドウみたいだね」

優菜「この折れた指治してやって」

アリエル「これですか?ディア」

パアア

出久「治った?」

オールマイト「これが、君の個性かい?試験の時の個性じゃないみたいだが」

優菜「これだけじゃないですけど・・・てかここ居ていいんですか?」

オールマイト「これは三人の秘密に!ね?」

優菜「ははは・・・わかりました、じゃあ行きますね」

出久「それではまた」

戻った

麗日「あ!治ってる!何で?」

優菜「終わってから話すから、とりあえず・・・私か次!」

相澤「喋ってる暇あったら準備しろ」

優菜「ホール」

下に作りそこにボールを落とした

ピピッ

2万km

皆「二万!?!」

優菜「二回目はやらなくていいですよ?」

悠「じゃあ俺も」

ピピツ

2万km

飯田「なんとという兄妹だ」

まああととは普通にやった

相澤「んじやパパつと結果発表、トータルは単純に各種目の評点合計した数だ口頭で説明すんのは時間の無駄なので一括開示する」

ブウン

相澤「ちなみに除籍は嘘な」

皆「・・・!?!」

相澤「君等の最大限引き出す合理的虚偽」

出久&麗日&飯田「はーーーーー!!!?!!」

百「あんなの嘘に決まってるじゃない!・・・少し考えればわかりますわ・・・」

相澤「そゆこと、これにて終わりだ。教室カリキュラム等の書類あるから目え通しとけ」

教室に戻って

優菜「安心したく先生の気が変わって」

百「何言ってるんですの?合理的虚偽とってたじゃないですか」

優菜「八百万百・・・だったよね?推薦で入った」

百「?そうですが」

優菜「なんもわかっっちゃいないね、あの目は本気だった。私達全員を除籍処分にするかもしれない様な目をしてた」

ガララララ

相澤「お前ら書類に目は通したか?細かいところ説明するから席に座れ」

第三話

結局次の日もいた

マイク「んじゃ次の英文のうち間違っているのは？エヴィバディヘンズアツプ盛り上がれー!!!」

普通だ

午前は必修科目・英語などの普通の授業！

昼は食堂で一流の料理を安価で頂ける！

クックヒーローランチラッシュ「白米に落ち着くよね最終的に!!!」

そして午後の授業！いよいよだ！ヒーロー基礎学!!

オールマイト「わーたーしーがー!!!」

出久「来っ」

オールマイト「普通にドアから来た!!!」

尾白「オールマイトだ：!!すげえや本当に先生やってるんだな：!!」

芦戸「銀時代のコスチュームだ・・・!画風違い過ぎて鳥肌が・・・」

オールマイト「ヒーロー基礎学!ヒーローの素地をつくる為様々な

訓練を行う科目だ!!早速だが今日はコレ!!戦闘訓練!!!」

爆豪「戦闘・・・」

出久「訓練・・・!」

オールマイト「そしてそいつに伴って・・・こちら!!!」

ガゴツ

左のカベからなんか出てきた

オールマイト「入学前に送ってもらった「個性届」と「要望」に沿っ

てあつらえた・・・コスチューム!!!」

皆「おおお!!!」

あれ？俺等のって：

悠「俺等のってあんのかな？」

優菜「そもそもないとは入れないと思うが・・・」

皆取りに行ってる

優菜「探してから考えよう」

あつた

優菜「あつたよ」

悠「安心したわ」

ん？そーういや

オールマイトに近づくと

優菜「先生、私の個性見たいって言ってたけど個性届見たんじやないの？」小聲

オールマイト「ああ、見たには見たんだが・・・ペルソナなんて個性初めて聞いてね！みたほうが早いと思つたのさ！」小聲

優菜「あ、そういうことですか」

オールマイト「よし、着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ！！」

皆「はーい!!!」

着替えてグラウンド

オールマイト「恰好から入るつても大切な事だぜ少年少女!!自覚するのだ!!!今日から自分は・・・ヒーローなんだと!!」

出久「皆早い・・・!!」

優菜「急げ〜デク〜」

オールマイト「さあ!!始めようか有精卵共!!戦闘訓練のお時間だ!!!」

デク来た

麗日「あ、デク君!?かつこいいね!!地に足ついた感じ!」

出久「要望ちゃんと書けばよかつたよ・・・パツパツスーツになった」

峰田「ヒーロー科最高」

出久「ええ!?!」

優菜「私たちはまさかの・・・」

悠「怪盗服」

優菜「慣れてはいるが」

悠「周りとズレすぎ」

麗日「優菜ちゃんたちもカッコいいよ!」

優菜「まあ怪盗服は動きやすし悪くはないか」

オールマイト「良いじゃないか皆カッコいいぜ!!」

飯田「先生!ここは入試の演習場ですがまた市街地演習を行うのですか!」

オールマイト「いいや!もう二歩先生踏み込む!屋内での対人戦闘訓練さ!!ヴィラン退治は主に屋外で見られるが統計で言えば屋内のほうが凶悪ヴィラン出現率高いんだ、監禁・軟禁・裏商売…このヒーロー飽和社会、ゲフン。真に賢しいヴィランは屋内に潜む!!君等にはこれからヴィラン組とヒーロー組に分かれて2対2の屋内戦を行ってもらう!!」

蛙吹「基礎訓練もなしに?」

オールマイト「その基礎を知るための実践さ!ただし今度はぶつ壊せばオツケーなロボットじゃないのがミソだ」

百「勝敗のシステムはどうなります?」

爆豪「ブツ飛ばしてもいいんすか」

麗日「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか…?」

飯田「分かれるとはどのような別れ方をすればよろしいですか」

青山「このマントヤバくない?」

オールマイト「んんん、聖徳太子イイ!!!いいかい!?状況設定は「ヴィラン」がアジトに「核兵器」を隠していて「ヒーロー」はそれを処理しようとしている!「ヒーロー」は制限時間内に「ヴィラン」を捕まえるか「核兵器」を回収すること「ヴィラン」は制限時間まで「核兵器」を守るか「ヒーロー」を捕まえること、コンビ及び対戦相手はクジだ!」

飯田「適当なのですか!」

出久「プロは他事務所ヒーローと急増チームアップすることが多いしそういう事じゃないかな…」

飯田「そうか…!先を見据えた計らい…失礼しました!」

オールマイト「いいよ!!早くやる!!」

飯田「ん?先生!この人数では一チーム余りますがどういう事でしょうか」

オールマイト「一チームだけ一対一でやってもらうよ!」

結果・・・俺と悠が一対一になった

優菜「よしこい」

悠「わかった」

出久「なんで!?!」

デクと爆豪がやってる間にどっちが誰使うか決めようと思ったんだが・・・

悠「ハッキリ言っただけで全員くれ」

優菜「それは無理」

悠「いいじゃねえか!お前は波紋あるし!」

優菜「波紋だけでもキツイわ!」

悠「だったらアリエルだけやる」

優菜「それこそおかしいだろ!」

悠「これ以上は無理だ」

優菜「あくもうわかったよ」

切島「おっ!お前らの番だぞ」

優菜「え!?!早ない!?!」

悠「行くぞ」

ヴィランが悠、ヒーローが俺

最上階に核と悠がいる

優菜「一階には何もいないか・・・上に行こう」
階段を上り進むと後ろから

スツ

優菜「!!」

屈んだ

首に鎌がかけられていた

優菜「最初はお前かよ・・・ヘル」

ヘル「やるからには本気でやるわよ」

優菜「殺す気っでことか?」

ヘル「魂はちゃんと回収してあげるわよ」

優菜「死ぬのはごめんだ」

ダッ

一気に詰める

コオオオオ

波紋を帯びた手で殴ったが・・・鎌でガードされた

優菜「波紋は間接的にでも流れるんだぜ？」

ビリッ

ヘル「ッ！」

離れた

優菜「お前には見せたことねえが・・・波紋はこんなこともできるんだぜ？」

ヘル「こんなこと？」

コオオオオ

波紋を練りまくり手から炎が出た

ヘル「何よそれ!!熱くないの!？」

優菜「熱いわ!!」

一気に近づく

優菜「緋色の波紋疾走（スカーレットオーバードライブ）!!!」

ヘル「キヤアアア!!」

ボッ

ヘル「熱い!!燃え移ってる!!燃え移ってるって!!消してー!!!」

優菜「先に進んでいいか？」

ヘル「いいから助けて!!」

アリエルのアムリタシャワーで治した

ヘル「はああああ助かった・・・」

優菜「先、行かせてもらうぞ」

ヘル「勝手にしなさい」

上に上がる

進むと今度は

気配のなかった場所から殴られた

優菜「グッ」

クリーンヒットしたが・・・

優菜「いきなり来たってことは・・・時間が止まったか、空間に穴開けて殴ったか・・・穴は見えなかったってことはクロノスかな？」

クロノス「そうだ、私がやった」

優菜「やっぱりかよ」

カオスなら攻略法はなんとなく思いついたが・・・クロノスはヤバいかも

クロノス「時間を止められては、お前は何もできない」

優菜「なら・・・先手必勝！」

ギリギリ時を止められカウンターを食らった

優菜「グツ」

クロノス「まだわからないのか・・・この私の力がなければ入試も合格できたか怪しいのに」

優菜「クロノス、この世で一番難しいことって知ってるか？」

クロノス「・・・何を言っている？」

優菜「いいから答えろ」

クロノス「・・・生きることか？」

優菜「違うね・・・いいか？最も難しいことは、自分を乗り越えることだ!!俺は今から自分というお前を乗り越えて先に行ってやる!!」

クロノス「・・・終わりにしてやろう」

次止められれば俺は終わりだ!なら・・・

コオオオオ

壁をぶっ壊す

ドツゴオ

クロノス「!?何をしている!!」

優菜「これは賭けだ!俺が賭けたんだ!そして来た!!」

ドボボボ

クロノス「水!?!」

優菜「本当に水が通ってるとは思わなかったがおかげで助かった!!」

水を口に含む

クロノス「何を・・・しているんだ？」

優菜「波紋カッターパパウパウ！」

シユシユシユ

ザザザ

クロノス「グッ！」

波紋カッターに続いて突っ込み

優菜「山吹色の波紋疾走!!」

クロノス「グアアア!!」

ドサツ

クロノス「ふっ強いじゃないか十分」

優菜「先に進ませてもらうぞ」

クロノス「ああ、終わったら戻って来い」

上に来た

優菜「この階が終わったら次は悠か・・」

穴が突然目の前に出てきた

腕が飛び出し殴りかかってきた

優菜「ッ！」

避けて腕を掴み引っ張り出す

優菜「オラア!!」

カオス「おわっ！」

ズサツ

カオス「まさか引っ張り出されるとは」

優菜「あのまま逃がしていたらさすがにきついだろ」

カオス「まっそれもそうだな」

優菜「悪いが速攻で終わらせてもらう、指弾」

パン

瞬間に指弾当たる前に穴を作られ作られた先は顔面の前だった

優菜「！」

咄嗟に避ける

ピッ

右頬に少しかすった

優菜「ホント、しんどいわ受ける側になったら」

カオス「わかってただろ？」

優菜「多分お前の攻略法もな」

カオス「なに？」

優菜「オラア！」

顔を殴ろうとするとやはり作られたので止める

カオス「俺には何も効かねえってわかってるだろ？」

優菜「いや、これでいい。これがいい！」

穴の後ろ側から自分の顔面めがけて殴ろうとすると

ゴツ

カオス「ガツ！」

優菜「やっぱりか・こつち側から殴って返ってくるなら反対側か

ら殴ったらお前の方に行つたか」

カオス「ハッ！早く立て直さないt」

コオオオオ

優菜「震えるぞハート！燃え尽きるほどヒート！刻むぞ血液のビー

ト！山吹色の波紋疾走!!」

ドドドドドドド

カオス「グオオオオオオ!!」

ドーン

壁に激しくぶつかった

カオス「いやく負けた負けた！」

優菜「後は、悠だけか？」

カオス「いや、イフリースの奴もいるぞ」

優菜「だろうな、アイツがそのままではいるはずがねえ」

アリエルに回復してもらい上に向かう

上上がりとうとう悠と対面した

悠「やっぱり上がって来たか」

優菜「結構大変だったんだぞ」

悠「だろうな、じゃあ・・・やるか」

優菜「ああ」

ダッ

ダッ

二人とも距離を詰める

悠「指弾で来ると思っていたんだが」

優菜「そんなこったろうと思つて、詰めたんだよ！」

ゴッ

お互いの顔面を殴りあつた

優菜「うおおおおお」

悠「うおおおおお」

どっちも引き下がらない

優菜「オラア!!」

避けられた

悠「イフリート！」

イフリート「オラオラオラオラオラ」

コオオオオ

優菜「ズームパンチ！」

腕が手元から一気に伸び

イフリアートの顔面に当たつた

悠「伸びた!?!」

優菜「止めだ食らえ！普通にドロップキックだ！」

イフリート「遅い！」

両足を両手で掴まれた

優菜「かかったな阿保が！」

開脚し防御強制的に解き手刀を交差し無防備な頭に向けて攻撃する

イフリート「うおおおお!!」

優菜「これはディオ以外には誰にも破られなかったダイアーさんの必殺技！稲妻十字空烈刃（サンダークロススプリットアタック）だ！」

ドガア

クリーンヒット！

イフリート「グッ!!」

優菜「どうよ！」

悠「慢心してんじやあないぞ！優菜！」

横腹を殴られ

ドゴオ

壁に激突した

優菜「カハッ」

悠「手加減はしねえぞ」

優菜「わかってらあ」

悠「行くぞ！」

優菜「最終ラウンドだ！」

ドドドドドドド

一分ほど殴り合い・・・

そして

優菜「オラア」

悠「オラア」

ドツゴオ

ギューン

ドーン

二人とも逆側に飛んで行った

悠「くっそ・・・もう動けねえ」

優菜「俺も・・・もう無理」

悠「はは・・・引き分けかよ」

優菜「いいや、俺の勝ちだね」

悠「はあ？なんでだよ」

優菜「この訓練がどうやって終わるか覚えてるか？」

悠「えつと・・・確か制限時間になるか、ヒーローがヴィラン捕まえる。もしくはヒーローが核兵器を処理する・・・だったよな？」

優菜「捕まえるのと処理の条件は？」

悠「相手をテープで巻きつけるのとヒーローが核兵器に触る・・・だったよな？」

優菜「さあここで問題です、俺のアリエルは今どこでしょう」

悠「！まさか!?!」

悠が核兵器の方を見る

アリエル「私達の勝ちです」

アリエルが核兵器に触ってる

悠「マジかよ・・・いつ出したんだ？」

優菜「お前忘れてねーか？アリエルたちは小さくも大きくもなれるんだぜ怪盗服のポケットの中に入れておいた、お前がよそ見している間に出てもらった」

悠「殴りあってる間にはもう俺は負けてたって訳か」

優菜「頼みがある」

悠「なんだ？」

優菜「動けない助けて」

悠「は？（呆）」

悠が来てくれて

俺をおんぶして戻る途中

優菜「ありがとな、兄いちゃくん」

悠「お前やっぱ恨んでるだろ」

優菜「へ？なんのことでしょうか」

悠「悪かったよ、俺のほうを兄にしたのは、でも見た目的に俺のほうが見えるだろ」

優菜「はいはい分かりましたよ・・・てかお前がおんぶしなくてもイフリート達に持たせればいいじゃねえか」

悠「このまま行ったほうが楽だ、だったらお前それ回復で治らないのか？」

優菜「いや、これはカンペキに疲労からくるやつだから。回復しても意味なし」

悠「あっそうなの」

オールマイト「おーい大丈夫かー!？」

悠「あっ先生、こいつ動けないって言ってるんで」

オールマイト「え!?!怪我したの!？」

優菜「怪我じゃなくて疲労ね」

オールマイト「ああ〜一分ぐらい殴りあってたからね〜君は大丈夫

なのか？」

悠「いや、割と限界です」

ガクガクガク

オールマイト「ものすごく震えてるね、手貸そうか？」

悠「いや、あと少しだから歩きますよ」

「そういや、出久は怪我して連れてかれてたけど・・・俺たちは怪我してないからかな？」

結局戻れた

麗日「あつ！優菜ちゃん！悠君！凄かったよ二人とも！」

悠「ちよつとどいてくんない？マジで限界」

ガクガクガクガク

麗日「限界ってどこが・・・足ヤバ!!」

隅に来て下ろしてもらった

優菜「大丈夫か？」

悠「お互い大丈夫じゃないだろ」

優菜「それもそうだね」

芦戸「そこから見える？」

悠「見えるからそつとしといてくれ」

芦戸「わかった」

優菜「ヤバイ、眠い」

悠「俺も」

意識が・・・

数分後

麗日「うわっ！今のスゴ！みた？優菜ちゃん！」

お茶子が優菜たちの方を見るが

麗日「あ、寝ちやってる」

飯田「訓練中だというのに・・・」

麗日「でもなんか微笑ましいよね、二人とも寄りかかりながら頭くっつけて寝てて」

オールマイト「それぐらい疲れてるといふことだ、そつとしておこ
う」

第四話

?「……………て……………きて……………起きて……………起きて!」

優菜「へ!?何!」

悠「ん?朝か?」

芦戸「もう訓練終わったよ」

優菜「ああ、寝ちやっただ」

麗日「仲良さそうに二人とも寄りかかってね」

優菜「…マジ?」

麗日「うん」

顔を手で塞ぐ

恥ずかしっ!

麗日「顔赤い…可愛い!」

峰田「ヒーロー科…最高!」

悠「え?どういう状況?」

ちよつとして

オールマイト「お疲れさん!!緑谷少年以外は大きなけがもなし!しかし真摯に取り組んだ!!初めての訓練にしちや皆上出来だったぜ!」

切島「相澤先生の後でこんな真つ当な授業…なんか拍子抜けというか…」

オールマイト「真つ当な授業もまた私たちの自由さ!それじゃあ私は緑谷少年に好評を聞かせねば!着替えて教室にお戻り!!」

バビューン

峰田「?急いでるなオールマイト…かけえ」

シッポは見えないようにして着替えた

次の日

登校中

ガゴガガガ

優菜「え?何で閉じてんの?」

マスコミ「君!雄英の生徒ですか?オールマイトについて何か教えてくれませんか?」

悠「とりあえず、これやったのあんたらのせい？」

マスコミ「素晴らしいのですが」

優菜「まあいいや、悠、壁のどこに來い」

手で足場を作って踏ん張る

優菜「よしこい」

悠「そういうこと」

ダダダッ

バツ

ググッ

ジャンピング

壁の上まで行った

優菜「先行つとけ」

悠「了解」

コオオオオ

波紋で壁に張り付きながら登る

優菜「あんたらもやりすぎんなよ！」

ダツシユで教室へ

席に着く

相澤「昨日の戦闘訓練お疲れ、Vと成績見させてもらった、爆轟おまえもうガキみてえなマネすんな、能力あるんだから」

爆轟「・・・わかってる」

相澤「で、緑谷は腕ぶっ壊して一件落着か・・・個性の制御・・・いつまでも「出来ないから仕方ない」じゃ通せねえぞ、俺は同じこと言うのが嫌いだ。それさえクリアすればやれることは多い焦れよ緑谷」

緑谷「っはい！」

相澤「さてHRの本題だ・・・急で悪いが今日は君等に・・・学級委員長を決めてもらう」

皆「学校っぽいの来たー!!!」

切島「委員長やりたいですソレ俺!!」

耳郎「ウチもやりたいス」

峰田「オイラのマニフェストは女子全員膝上30CM!!」

青山「ボクの為にあるヤツ☆」

芦戸「リーダー!!やるやるー!!」

優菜「皆手上げるじゃん」

飯田「静粛にしたまえ!!多をけん引する責任重大な仕事だぞ・・!
「やりたい者」がやれるモノではないだろう!!周囲からの信頼あつてこそ務まる聖務・・!民主主義に則り真のリーダーを皆で決めるというのなら・・これは投票で決めるべき議案!!」

ビイイイン

切島「そびえ立ってんじやねーか!!何故発案した!!」

蛙吹「日も浅いのに信頼のクソもないわ飯田ちゃん」

切島「そんな皆自分にいれらあ!」

飯田「だからこそ、ここで複数票を獲った者こそが真にふさわしい人間という事にならないか!?!どうでしょうか先生!!」

相澤「時間内に決めりや何でも良いよ」

結果・・出久三票、百二票により、学級委員長出久副委員長百になつた

昼飯中

ウウー

警報アナウンス「セキュリティ3が突破されました、生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください」

飯田「セキュリティ3で何ですか?」

三年生「校舎内に誰か侵入してきたってことだよ!三年間でこんな
の初めてだ!!君等も早く!!」

気で飛ぶ

優菜「どういうことだ?」

外を見る

優菜「マスクミか・・」

クロノスで窓を割り

バライイン

外にでる

優菜「何してるんですか?」

ダダダダダダダ

マスコミ「オールマイトについて何か一言!!」

優菜「それだけ？」

マスコミ「どこにいるかだけでも・・・」

優菜「いい加減にしてくれませんか？」

ゴゴゴゴゴゴ

マスコミ「なんだ!?地震か!」

優菜「立派な不法侵入ですよね?コレ」

マスコミ「一言貰えればすぐに帰りますから!」

優菜「カクゴハデキテルンデスヨネ?」

ギロツ

相澤先生が余計なことするな見たいな目で見てる
ウーウーウー

警察「警察です、事情を説明してください」

優菜「はあくさっさと行ってくださいよ」

マスコミ撤退

戻って教室

百「ホラ委員長初めて」

出久「でっでは他の委員決めを執り行って参ります!・・・けどその前にいいですか!委員長はやっぱり飯田君がいいと・・・思います!あんな風にかっこよく人をまとめられるんだ、僕は・・・飯田君がやるのが正しいと思うよ」

切島「あ!良いんじゃないね!!飯田食堂超活躍してたし!!緑谷でも別に良いけどさ!」

上鳴「非常口の標識みてえになってたよな」

相澤「何でも良いから早く進めろ・・・時間がもったいない」

出久「ひっ!!」

飯田「委員長の指名ならば仕方あるまい!!」

切島「任せたぜ非常口!!」

瀬呂「非常口飯田!!しっかりやれよ!!」

悠「なあ、アレってマスコミに出来る様なものなのか?」

優菜「門のやつか?・・・出来るわけないだろ」

つぐのひ(次の日)

相澤「今日のヒーロー基礎学だが・・・俺とオールマイトそしてもう一人の三人体制で見ることになった」

瀬呂「ハイ!何するんですか!?

相澤「災害水難何でもござれ、人命救助訓練だ!!」

上鳴「レスキュー・・・今回も大変そうだな」

芦戸「ねー!」

切島「バカおめーこれこそヒーローの本分だぜ!?鳴るぜ!!腕が!!」
蛙吹「水難なら私の独壇場ケロケロ」

相澤「おいまだ途中、今回コスチュームの着用は各自の判断で構わない、中には活動を限定するコスチュームもあるだろうからな。訓練場は少し離れた場所にあるからバスに乗っていく、以上準備開始」

体操服でバスの中

優菜「スースースー」

悠「いや寝るなよ・・・」

爆豪「んだとコラ出すわ!!」

上鳴「この付き合いの浅さで既にクソを下水で煮込んだような性格と認識されるってすげえよ」

爆豪「てめえのボキャブラリーは何だコラ殺すぞ!!」

優菜「うっせえ黙れ!!!」

相澤「もう着くぞ、いい加減にしとけよ・・・」

皆「ハイ!!」

着いた

切島「すっげー!!USJかよ!!?」

13号「水難事故、土砂災害火事・・・ETC、あらゆる事故や災害を想定し、僕がつくった演習場ですその名も・・・ウソの(U)災害や(S)事故ルーム!!(J)」

出久「スペースヒーロー「13号」だ!災害救助でめざましい活躍をしている紳士的なヒーロー!」

麗日「わー私好きな13号!」

なんか話してる

優菜「今のうちに・・・みんな出しとくか」

悠「イフリート、ガイア、カオス」

優菜「アリエル、クロノス、ヘル」

全員出した

優菜「まあ、あくまで演習だからそこまで本気にすんじゃねえぞ・・・

特にヘル」

ヘル「言われなくてもわかってるわよ」

優菜「殺すんじゃないかって助けるだからな」

相澤「仕方ない始めるか」

13号「えー始める前にお小言を一つ二つ・・・三つ・・・四つ・・・」

皆の心の声「増える・・・」

13号「皆さんご存知だとは思いますが、僕の個性はブラックホール、どんなものでも吸い込んでチリにできてしまいます」

出久「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね」

13号「ええ・・・しかし簡単に人を殺せる力です、皆の中にもそういう個性がいるでしょう、超人社会個性の使用を資格制にし厳しく規制することで、一見成り立っているようには見えません。しかし一歩間違えれば容易に人を殺せるいきすぎた個性を個々が持っていることを忘れないで下さい、相澤さんに体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイイト対人戦闘でそれを人に向ける危うさを体験したかと思えます。この授業では・・・心機一転！人命の為に個性をどう活用するかを学んでいきましょう、君達の力は尾を傷つける為にあるのではない、助けるためにあるのだと心得て帰って下さいな。以上！ご清聴ありがとうございました」

麗日「ステキー！」

飯田「ブラボー!!ブラーボー!!」

相澤「そんじゃあまずは・・・」

優菜「オイ、こいつは殺気じゃねえか?」

相澤「一塊になって動くな!!13号!!生徒を守れ!」

切島「何だアリア!?また入試時みたいなもう始まってんぞパターン

？」

相澤「動くなあれはヴィランだ!!!」

相澤先生が応戦に行く

黒い霧がこっちに

黒霧「初めまして我々はヴィラン連合せんえつながら…この度ヒーローの巣窟雄英高校に入らせて頂いたのは平和の象徴オールマイトに息絶えて頂きたいと思つての事でした、本来ならばここにオールマイトがいらつしやるはず…ですが何か変更あつたのでしょうか？まあ…それとは関係なく…私の役目はこれ」

パアン（優菜）

ドーオオオオン（爆豪）

シャツ（切島）

切島「その前に俺たちにやられることは考えてなかつたか!？」

黒霧「危ない危ない…そう…生徒といえど優秀な金の卵」

13号「ダメだどきなきい二人とも!」

ズアアア

出久「皆!!」

少し散らばったか？あつ優菜もいない

悠「イフリートは俺と一緒に、他は皆の救助及び援護をしてくれ」

散つて行つた

飯田「皆は!?!いるか!?!確認できるか!?!」

障子「散り散りにはなつてはいるがこの施設内にいる」

瀬呂「物理攻撃無効でワープつて…!!最悪の個性だぜおい!!」

13号「…委員長!」

飯田「は!!」

13号「君に託します、学校まで駆けてこのことを伝えてください。警報ならずして電話も圏外になっていました、警報機は赤外線式：先輩・イレイザーヘッドが下で個性を消しまわっているにも拘らず無作動なのは…恐らくそれらを妨害可能な個性がいて…即座に隠したのでしようとするとそれを見つけ出すより君が駆けたほうが早い!」

飯田「しかしクラスを置いてくなど委員長の風上にも」

砂籐「行けて非常口!!」

外に出れば警報がある! だからこいつらはこん中だけで事を起こしてんだろう!？」

瀬呂「外にさえ出られりや追つちやこれねえよ!! お前の脚でモヤを振り切れ!!」

13号「救うために個性を使ってください!!」

麗日「食堂の時みたく・サポートなら私超できるから! する!! करा!! お願いな委員長!!」

黒霧「手段がないとはいええ、敵前で策を語る阿保がいますか」

13号「バレても問題ないから語ったんでしようが!!」

その頃の優菜

飛ばされたか!

水!? 水難か

コオオオオ

弾く波紋で!!

優菜「うおおお!!」

バチバチバチ

立てた!!

何でかわからんけど行けたぞ!

ヴィラン「ガアアアア」

ガブツ

ビリリリリ

ヴィラン「ギアアアア」

プカー

魚みたいに浮いてるな・

出久達が船に上がっているから俺も上がろう

優菜「大丈夫か? 全員」

出久「僕らは蛙吹さんに助けてもらったよ」

蛙吹「梅雨ちゃんと呼んでしかし大変なことになったわね」

出久「カリキュラムが割れてた・! 単純に考えれば先日のマスクコ

ミ乱入は情報を得る為に奴らが仕組んだってことだ、轟君が言った様に・・・虎視たんたと・・・準備を進めていたんだ」

峰田「でもよでもよ！オールマイトを殺すなんて出来っこねえさ！オールマイトが来たたらあんな奴らケチヨンチョンだぜ」

蛙吹「峰田ちゃん・・・殺せる算段が整ってるから、連中こんな無茶してるんじゃないの？そこまでできる連中に私達鬺り殺すって言われたのよ？オールマイトが来るまで持ちこたえられるかしら？オールマイトが来たとして・・・無事に済むのかしら」

峰田「みみみ緑谷ア!!!」

ヴィラン「んのヤロオ!!殺してやる!!」

峰田「大量だあああ〜!!!」

優菜「・・・」

出久「奴らに・・・オールマイトを倒す術があるんなら・・・!!僕らが今すべきことは・・・戦って・・・阻止する事!!」

峰田「何が戦うだよバカかよおオールマイトブツ倒せるかもしれねー奴らなんだろう!?矛盾が生じてんぞ緑谷!!雄英ヒーローが助けに来てくれるまで大人しくが得策に決まってるらしい!!」

出久「峰田君下の連中・・・明らかに水中線を想定してるよね」

峰田「ムシかよー!!」

蛙吹「この施設の設計をした上で人員を集めたってこと?」

出久「そう!そこまで情報仕入れておいて、周到に準備してくる連中にしちやおかしな点がある、この水難ゾーンに蛙すっ・・・つつ梅雨っ・・・ちゃんが移動させられてるって点!!」

蛙吹「自分のペースで良いのよ」

出久「あ、そうなの・・・」

峰田「だから何なんだよー!!?」

出久「だからつまり!生徒の個性は分かかってないんじゃない?」

蛙吹「蛙の私を知ってたらあっちの火災ゾーンにでも放り込むわね」

出久「僕らの個性が分からないからこそきつと、バラバラにして数で攻め落とすって作戦にしたんだよ。数も経験も劣る!勝利の鍵は

一つ！僕らの個性が相手にとって未知であること!!敵は船に上がるうとしてこない！これが仮説を裏付けてる！」

個性確認

蛙吹「私は跳躍と壁に貼り付けると舌を伸ばせるわ最長で20M程あとは胃袋を外に出して洗ったり、毒性の粘液・・・といっても多少ピリツとする程度のを・・・分泌できる」

峰田「分・泌・・・!!」

蛙吹「後半二つはほぼ役に立たないし忘れていいかも」

峰田「分・泌」

優菜「黙れ峰田」

出久「薄々思ってたけど・・・強いね、僕は・・・超パワーだけど・・・使った先からバッキバキになる・・・諸刃の剣的な・・・アレです」

峰田が頭から玉をもぎり壁にくつつける

峰田「超くつつく体調によっちゃ一日たってもくつついたまま、モギったそばから生えてくるけどモギリすぎると血が出る、オイラ自身にはくつつかずにブニブニ跳ねる」

・・・
・・・
・・・

峰田「だから言ってるんだろ大人しく助けを待とうってよおオイラの個性はバリバリ戦闘に不向きな〜!!!」

出久「ちっ違うってば凄い個性だから活用法を考えて・・・」

ドシヤアアアン

ヴィラン「じれったいだけだ、ちやつちやと終わらそう」

蛙吹「なんて力・・・！船が割れたわ」

峰田「ううう〜」

優菜「アイツら全員黙らす」

出久「ちよつと待って!!」

空中

峰田「おい!!死に行く気かよ!!」

コオオオオ

ヴィラン「てめえはさっきの!!ぶっ殺してやる!」

優菜「うちの業界にそんな言葉はねえ、「ぶっ殺す」と心の中で思ったならッ!その時すでに行動は終わっているんだッ!!青緑波紋疾走(ターコイズブルーオーバードライブ)!!」

ドパアアアン

ビリリリリリ

出久「・・・!!峰田君!さっきのを投げて!」

峰田「え?わ、わかった!」

ポポポポポポポ

気で上に上がる

ゴオオオオオオ

優菜「水面に強い衝撃を与えたら、広がってまた中心に収束する」
ザパアアン

優菜「そうだろ、デク」

出久「うん!」

優菜「梅雨ちゃん!二人をこっちに!」

他のみんなは・・・

倒壊ゾーン

カオス「ここは大丈夫なのか?」

爆豪「てめえは確か・・・」

切島「悠が使ってたやつだよな?」

カオス「やることあるか?」

切島「いや、ここは全部倒しちゃったよ」

カオス「大丈夫ってことだな?じゃあ他のどこ行くか」

火災ゾーン

尾白「クソツ敵が多いな・・・」

ヴィラン「オラア!!」

尾白「後ろから!?!ぐっ」

バキッ

ズガアアアアン

シッポで飛ばす

ヴィラン「隙あり！」

尾白「しまっ」

パン

ドサツ

尾白「え？」

アリエル「大丈夫ですか？」

尾白「あんたは優菜の・・・」

パンパンパンパン

ドサアアア

アリエル「怪我してるなら治しますよ」

尾白「助かる」

アリエル『誰か応援来れますか？』

カオス『俺今終わったから向かう、どこだ？』

アリエル『火災ゾーンです』

カオス「大丈夫か？」

尾白「え!?!ワープ!?!」

カオス「お前は回復してな、そのうちにこいつらは片付ける」

ヴィラン「なんだとく!!」

アツパーカット!!

ドサツ

カオス「どんどん来いよ」

土砂ゾーン

ヘル「えええええ・・・氷?コレ・・・すごいわね。・・・!!向こうに

魂が一つあるわね」

近づく

ヘル「貴方・・・何してるの?」

葉隠「え!?!あつ貴方は・・・」

ヘル「ちよつとヤバそうだから、さっさと出るわよ」

葉隠「はい！」

ヘル『こつち一人見つけた、終わるまで援護しとく』

他のペルソナ皆『了解』

カオス『こつちは、アリエルと一緒に応戦中一人見つけたから終わりまで一緒にいるぞ。あつてもその前に二人あつたが、もう全員倒していたぞ』

ガイア『私は、今二人見つけたから今から行く』

暴風・大雨ゾーン

常闇「ちよつときついか？」

口田「・・・」ボソボソ

ガイア「氷よ、刺され」

ピキピキピキーン

ザザザザ

ドストドスト

常闇「なんだ!？」

ガイア「やつほー!大丈夫?」

口田「・・・」ボソボソ

ガイア「よし、こいつら倒せばいいのね」

戻つて

クロノス『三人見つけたが、おしているので見守っている。ヤバくなりそうだったら入る』

入り口付近

イフリート「把握した」

悠「大丈夫そうだな、だが・・・あれはちとヤバげだな」

黒霧「13号、災害救助で活躍するヒーローやはり・・・」

芦戸「先生ー!!」

黒霧「戦闘訓練は一般ヒーローに比べ半歩劣る、自分で自分をチリにしてしまった」

悠「ワープゲートウラックホールの吸い込み先を背中に!!」

砂籐「飯田ア走れつて!!!」

飯田「くそう!!」

黒霧「散らし漏らした子ども・・・教師たちを呼ばれてはこちらも大変ですのぞ」

飯田の前にワープゲート

障子が庇う

障子「行け!!早く」

飯田「くそっ!!」

優菜たち

・
・
・

相澤先生は・・・脳が露出した化け物にやられていた

死柄木「対平和の象徴、改人脳無」

また入り口

飯田「くっ・・・!!」

黒霧「ちよこぎいな・・・!外には出させない!」

麗日が走り出す

芦戸「麗日どうしたの!!」

麗日「皆!アレ!」

悠「そうか!」

悠も走る

飯田「ええい!!」

黒霧「生意気だぞメガネ・・・!消えろ!!」

悠「イフリート!!」

ガシッ

イフリート「こんなのがついているという事は!」

麗日のほうになげる

麗日「実体があるってことよね!!!行けええ!!!飯田くーん!!!」

ピタッ

瀬呂のテープがくつついた!

瀬呂「行けええ!!」

ダッ

飯田は行つた

瀬呂が投げ飛ばす

優菜たち

ベキバキ

相澤「くっ!!!」

右腕がどんどん折られていく

死柄木「個性を消せる、素敵だけなんてことはないね、圧倒的な力の前ではつまりただの無個性なもの」

脳無が左腕も・・

グシヤ

相澤「ぐあ・・!!」

頭を持ち上げ叩きつける

ドウン

ヒューヒューヒュー

優菜「お前らは逃げろ、アイツは俺がやる」

出久「それは何・・!? 一体どうやって・・・!?」

峰田「止めないとアイツ死んじゃうよ!!」

ゴオオオオオオ

脳無に蹴りを入れようとするが

ガシッ

掴まれる

優菜「なにっ!?!」

グウングウン

これ投げ飛ばされるやつだ!

コオオオオ

カオス!いつもの頼む!!

怪盗服になる

これが今の最大だ!

うおおお!!

ベジットソードを使って腕を切り落とす

遠心力で少し飛ばされるがすぐ戻る

ズグ

斬った部分がまた生えてくる

波紋はあまり効いてないか・・

死柄木「お前はガキの一人か?」

優菜「ダメレ」

死柄木「へえ・・・お前人殺したことあるんじゃないか？いや、あるだろ・・・その目は殺したことがないといけない目だぞ」

優菜「知るかy」

ドゴオ

隙を衝かれた

優菜「しまっ！」

ボゴオオ

ガラッ

タラー

血が出てるのか？当たり所が悪かったか・・・

目の前が真っ赤だ・・・

黒霧「死柄木弔」

死柄木「黒霧、13号はやったのか」

黒霧「行動不能には出来たものの散らし損ねた生徒がおりまして・・・一名逃げられました」

死柄木「・・・は？はー・・・はあー・・・黒霧お前・・・お前がワー
プゲートじゃなかったら粉々にしてたよ・・・さすがに何十人ものプロ
相手じゃ敵わない、ゲームオーバーだあーあー今回はゲームオーバー
だ、帰ろっか」

峰田「・・・？帰る・・・？カエルつつったのか今??」

蛙吹「そう聞こえたわ」

峰田「やつやったあ助かるんだ俺たち！」

蛙吹「ええでも・・・君が悪いわ緑谷ちゃん」

緑谷「うん・・・これだけのことをしといて・・・あっさり引き下がるなんて・・・」

死柄木「けどもその前に、平和の象徴としての矜持を少しでも」

!!クソッ

気弾を蛙吹の前まで放った

死柄木「へし折って帰ろう！」

スパアアン

少し弾いただけだった

そんなに・・・残ってねえのかよ・・・

死柄木「死んでもクラスメイトは守るってかあ？そうだよなあ・・・
あんなこと言った手前、犬死するわけにはいかねえもんなあ!!」

顔に触れる寸前まで手が・・・!

ひた

触られた!!

・・・アレ?

死柄木「・・・本っ当かっこいいぜ、イレイザーヘッド」

出久が向かってくる

出久「手っ・・・放せえ!!」

死柄木「脳無」

ズド

今の俺からしたらワンフォーオールの方が強いはず・・・!

出久「スマツシユ!!!」

ザッ

まったく・・・効いてない・・・?

出久「え・・・」

死柄木「お前もいい動きするなあ・・・スマツシユって・・・オール
マイトのフォロワーかい？まあいいや君」

バアン!

オールマイト「もう大丈夫私が来た!」

峰田「オールマイトー!!」

死柄木「あー・・・コンティニューだ」

オールマイト「嫌な予感がしてね・・・校長のお話を振り切りやって
きたよ、来る途中で飯田少年とすれ違って・・・何が起きているかあら
まし聞いた」

皆「オールマイトオオ!!!!」

死柄木「待ったよヒーロー!、社会のゴミめ」

ヴィラン1「あれが：!!生で見るの初めてだぜ：!!迫力すげえ：」

ヴィラン2「バカヤロウ尻ごみすんなよ、アレを殺って俺たちが：」
喋ってたヴィランを倒し

相澤先生の所に

オールマイト「相澤君すまない」

今度は俺と出久たちを死柄木から離れた

オールマイト「皆入口へ、相澤君と優菜君を頼んだ。相澤君は意識がない、優菜君は一人で歩けそうにない早く!!」

イフリート「みんな聞いてたな？入り口に皆を」

クロノス『そろそろ終わりそうだから、終わったら行く』

ガイア『今終わった、向かうわ』

ヘル『こっちはさつきから待ってたわよ』

カオス『こっちも今終わった、向かう』

イフリート「だそうだ」

悠「オーケー」

山岳ゾーン

ヴィラン「手え上げろ個性は禁止だ、使えばこいつを殺す」

百「上鳴さん・!!」

耳郎「やられた・!!完全に油断してた・・・」

ヴィラン「同じ電気系個性としては、殺しはしたくないがしようがないよな」

耳郎「全滅させたと思わせてからの伏兵・・・こんなことも想像出来ていなかったなんて・・・」

百「電気系・・・！恐らく轟さんの言っていた通信妨害してる奴ね・・・！」

ヴィラン「そっちへ行く決して動くなよ」

耳郎「・・・上鳴もだけどさ・・・電気系つてさ「生まれながら勝ち組」じゃん？」

百「？何を・・・だつてヒーローでなくても色んな仕事あるし引く手数多じゃん、いや純粋な疑問ね？なんでヴィランなんかやってんのかなって・・・」

耳郎の右耳からプラグが伸びて右足のスピーカーまであと少しの所まで来たところで

ヴィラン「気づかないとでも思ったか？」

上鳴「ウエイ!?!」

耳郎「くっ!!」

ヴイラン「子供の浅知恵などバカな大人にしか通じないさ、ヒーローの卵が人質を軽視するなよ。お前達が抵抗しなければこのアホは見逃してやるぜ? 他人の命か自分らの命か・・・! さあ・・・動くなよ・・・」

クロノス「行かないといけないか」

時間を止めて上鳴を助ける

そして時は動き出す

上鳴「ウエイ?」

百「上鳴さん!」

クロノス「しっかり守りな」

耳郎「あんたは!」

ヴイラン「クソツ」

クロノス「惜しかったなあ、あともう少し早かったら、殺せていたのに」

ヴイラン「ならお前を先に殺してやる!」

クロノス「何を言っている・・・お前はもう・・・死んでいる」

ヴイラン「なn」

パパパパパパパン

ドバシヤ

ビシヤツ

ドサツ

クロノス「お前に起こる事の時間を遅らせた」

さっきの時間停止時に何発も撃っておいた

耳郎「とりあえず、もう大丈夫ってこと?」

クロノス「他のやつは、もう入口の所にいる。さっきオールマイトも来た」

百「わかりました、速く行きましょう」

上鳴「ウエイ?」

優菜たち

・・・今、どういう状況なんだ？

峰田「逃げるぞ！優菜！」

逃げる・・・？確かオールマイトが来て・・・そうだな・・・脳無とオールマイト「そういう感じか・・・!!」

オールマイトが脳無を突き立てたかと思っただら黒霧の所為で横腹を掴まれ血がにじんでいるBY悠

よし、大体わかったぞ

今俺は、どこを見ている・・・薄い紫・・・血が目に入って赤いのは分かる、という事は・・・水色のものを見ているという事だ・・・こんなでかい水色は・・・空か！

あのピンクのはまさか!!月か!!

そうだな！大猿になれば・・・！血なんか目から抜ける!!

スウウウ

消えた!!何でか分からんが好都合だ!!

月を見る

ドクン

来た！理性を保たないと!!

悠「こいつは・・・！峰田！優菜から離れろ！」

峰田「え？」

悠「蛙吹さんも早く！イフリート！手伝ってくれ！」

相澤先生を運ぶ

出久「ごめん、みんな」

蛙吹「いきなりどうしたのよ、緑谷ちゃん」

出久がオールマイトに向かって走り出す

出久「オールマイトオ!!!!」

黒霧「浅はか」

おいおいマジかよ、もうこっちは成りかけだったのに・・・

ドクン・・・ドクン

優菜「グウウ・・・アガアアアアアア!!!!」

出久「優菜さん!？」

顔の骨格が変わっていく・・・全身が毛だらけになっていく・・・

意識が遠のいていく・・・ダメだ！保たないと!!
パキパキパキ

脳無の右半身が凍る

オールマイト「これは・・・!」

オールマイトが抜けだす

轟「オールマイトを助けられたのはいいが・・・こりや一体何だ?」

大猿優菜「ウギャアアアアア!!」

黒霧「これは一体!?!」

死柄木「はあー・・・面倒なことになりやがった」

爆豪「なんだあれ」

オールマイト「一体どういうことだ!?!」

意識は・・・ある！保てた!!

脳無がオールマイトに・・・!

やらせはせん!やらせはせんぞー!!

ドゴオ

脳無を殴りつぶす

まだ動けるか

なら・・・

ピカーッ

黒霧「今度は何だ!?!」

出久「眩しっ」

優菜「ハアアアアアア・・・」

悠「おいおい、マジかよ」

優菜「よしっ!成れた!」

死柄木「なんだ?ソレ、真っ赤な毛が体中に生えてるじゃねえか」

オールマイト「本当に、何段階あるんだよ。その変身!」

優菜「止めを刺してやるよ」

脳無を上を蹴飛ばす

脳無「ガアアアア!!」

全身を一瞬で殴り倒しもう一段階上へ

ギューン

10倍か・・・め・・・は・・・め・・・

優菜「波ー!!!」

ギューンドオオオオオオオオオオ

脳無「グギャアアアアア」

シユン

優菜「オールマイト殺ろうつてには、ちと弱いんじゃないかな?」

死柄木「お前に殺られるなんてな」

優菜「さあどうする?こつちには、爆豪に轟に地味に切島にオール

マイトにこの俺だ。逃げるか、ここで死ぬか選びな!」

切島「地味につてなんだよ!」

オールマイト「どうした?来ないのかな!?クリアとかなんとか言っ

てたが・・・出来るものならしてみろよ!!」

クリア?大猿なる時言つてたのかな?

優菜「後は任せていいか?俺今根性だけで立ってんだけど」小声

超サイヤ人4はなったばっかして元がボロボロだから立ってるの

が限界だ

轟「いや、後はオールマイトに任せるぞ。俺たちがいても邪魔なだ

けだろう」

切島「そか?なら優菜は俺が連れて行く」

オールマイト「さあどうした!」

黒霧「何より・・・脳無の仇だ」

行くんかい!!

ダツ

切島「な・・・緑谷!!」

出久「オールマイトから離れる!!」

黒霧「二度目はありませんよ!!」

死柄木の手がワープゲートを通して緑谷の顔に当たる瞬間

ドズ

オールマイト「来たか!!」

?「ごめんよ皆、遅くなったね」

麗日「飯田君・・・!」

飯田「すぐ動けるものをかき集めてきた、1―Aクラス委員長飯田天哉!! ただいま戻りました!!」

死柄木「あーあ来ちゃったな・ゲームオーバーだ、帰って出直すか」

バンバンバンバン

死柄木「ぐっ!!!」

銃を撃っているヒーロー「この距離で捕獲可能な個性は・・・」

死柄木がワープゲートで逃げようとする

黒霧「これは・・・」

引っ張られてる

13号「僕だ・・・!!」

死柄木「今回は失敗だったけど・・・今度は殺すぞ平和の象徴オールマイト」

逃がしてたまるかよ!

ダッ

拳が当たる寸前に消えられた

13号はもう吸い取ってはいなかった

シユン

超サイヤ人が解けた

ドサッ

カオス、怪盗服の維持だけ頼む

出久「・・・何も・・・出来なかった・・・」

オールマイト「そんなことはないさ、あの数秒がなければ私はやられていた・・・! また助けられちゃったな」

出久が泣きながら言う

出久「無事で・・・良かったです・・・!」

切島「緑谷あ!! 優菜あ!! 大丈夫か!?!」

出久「切島君・・・!」

オールマイトの心の声「切島少年!! なんて素晴らしい心持ち!! しかし待ってバレてしまうヤバい待ってくっそおおお」

出久「待っ・・・」

ズツ

地面が盛り上がり壁ができた

セメントス「生徒の安否を確認したいからゲート前に集まってくれ、ケガ人の方はこちらで対処するよ」

切島「そりやそうだ！ラジャツす!!」

オールマイト「ありがとう助かったよ・・・セメントス」

セメントス「俺もあなたのファンなので・・・このまま姿を隠しつつ保健室へ向かいますよ、しかしまア毎度無茶しますねその子・・・」

オールマイト「ああ、ですけどすごい個性だ、優菜君にも助けられた。気絶してるみたいだけどね」

出久「優菜さんは大丈夫でしょうか？」

優菜「大丈夫って言ったら嘘になるけど、オールマイトのその姿何？」

オールマイト「意識あったの!？」

優菜「後で話聞かせてくださいよ」

保健室

オールマイト「優菜君はどうですか？状態は」

リカバリーガール「見た目より状態は良かったよ、少し休んだら動けるさ」

優菜「説明してくれるんですよね？その姿の事」

説明してもらった

優菜「つまり、そのヴィランの攻撃を受けてからずっと筋肉モリモリマツチョマンの変態になれなくなっただって訳ですね」

オールマイト「変態はいらないけどね」

優菜「じゃあ、デクとはどういう関係？」

オールマイト「それは・・・」

優菜「言いたくないなら、言わなくていいですよ。大体わかりますし」

出久「分かるの!？」

優菜「実はさ、この前のオールマイトの授業の時に爆轟とデクが話してるの聞いちゃったんだよね」

ウソだけど

出久「聞かれてたんだ・・・」

優菜「できっきの反応見た感じ・・・デクが受け継いだ個性って、オールマイトのやつ?」

オールマイト「・・・その通りだよ」

リカバリーガール「いいのかい?言ってしまったって」

オールマイト「言っても言わなくても同じだと思うし、君なら周りには言わないうなって思ったからね」

優菜「あっコレ悠も聞いてますよ」

イフリートから聞いているはず

オールマイト「ゑ、本当!」

優菜「マジっす」

オールマイト「・・・ハッキリ言っつて口軽い?」

優菜「大丈夫と思いますけどね」

オールマイト「ならよかった・・・」

優菜「代わりと言っつちやなんです、私の身の上話柄も聞きますか?」

オールマイト「身の上話かい?」

これまでの経緯を話した

オールマイト「・・・すごいね、にわかには信じられないよ」

出久「最初からもう一回いい?メモに書いておくから」

優菜「お前、それ癖なの?」

ガララ

塚内「失礼します・・・オールマイト久しぶり!」

オールマイト「塚内くん!!君もこっちに來てたのか!!」

出久「オールマイト・・・え・・・良いんですか!?!姿が・・・」

オールマイト「ああ!大丈夫さ!何故つて!?!彼は最も仲良しの警察塚内直正くんだからさ!」

塚内「ハハツ何だその紹介、早速で悪いがオールマイト、ヴィランについて詳しく・・・」

オールマイト「待った待ってくれそれより・・・生徒は皆無事か!?!相

澤・・イレイザーヘッドと13号は!!」

塚内「・・・生徒はその彼と彼女以外で軽傷数名、教師二人はと
りあえず命に別状なしだ。三人のヒーローが身を挺していなければ、
生徒らも無事じゃすまなかつたらうな」

オールマイト「そうか・・・しかし一つ違うぜ塚内君、生徒らもまた
戦い身を挺した!!こんなにも早く実戦を経験し生き残り大人の世界
を恐怖を知った一年生など今まであったらどうか!?ヴィランもバカ
な事をした!!このクラスは強いヒーローになるぞ!!私はそう確信し
ているよ」

優菜「でも今回オールマイト助け来たけど、脳無は私が倒したし
オールマイト立ってただけですよね?」

オールマイト「そこは言わないでくれ・・・」

その後出久にもう一度言つてメモを取り終え悠と帰って寝た

明日は臨時休校なので次はその次の日から

第五話

教室

飯田「皆ー!!朝のHRが始まる、席につけー!!」

瀬呂「ついてるよ、ついてねーのおめーだけだ」

スツ

相澤「お早う」

皆「相澤先生復帰早えええ!!!」

包帯ぐるぐる巻きやん

飯田「先生無事だったのですね!!」

麗日「無事言うんかなアレ・・・」

相澤「俺の安否はどうでもいい、何よりまだ戦いは終わってねえ」

爆豪「戦い?」

出久「まさか・・・」

峰田「まだヴィランがー!!?」

相澤「雄英体育祭が迫ってる!」

皆「クソ学校っぽい来たああ!!」

芦戸「待つて待つて!ヴィランに侵入されたばっかなのに大丈夫な
んですか!?!」

相澤「逆に開催することで雄英の危機管理体制が盤石だと示す：つ
て考えらしい、警備は例年の五倍に強化するそうだ。何より雄英の体
育祭は：：最大のチャンス、ヴィランごときで中止していい催しじゃ
ねえ」

峰田「いや、そこは中止しよう?」

出久「峰田君・雄英体育祭見たことないの!?!」

峰田「あるに決まってんだろそういう事じゃなくて」

相澤「ウチの体育祭は日本のビッグイベントの一つ!!かつてはオリ
ンピックがスポーツの祭典と呼ばれ全国が熱狂した、今は知っての通
り規模も人口も縮小し形骸化した・・・そして日本に於いて今「かつて
のオリンピック」に代わるのが雄英体育祭だ!!」

百「当然全国のトップヒーローもみまますのよ、スカウト目的でね!」

上鳴「資格習得後はプロ事務所にサイドキック入りが定石だもんな」

耳郎「そっから独立しそびれて万年サイドキックも多いんだよね、上鳴あんたそーなりそうアホだし」

上鳴「くっ!!」

相澤「当然名のあるヒーロー事務所にいった方が経験値も話題性も高くなる、時間は有限プロに見込まれればその場で将来が拓けるのだ、年に一回・・・計三回だけのチャンス、ヒーロー志すなら絶対に外せないイベントだ！」

昼休みのみんなのテンションはマックスだった

もちろん オールマイト「ごはん：一緒に食べよ？」 麗日「乙女や!!」もあつた

それから一日一回腕立て伏せ、腹筋、スクワット、ランニング10KM+瞑想しまくった

悠も一緒にやっていたが・・・一日で死んだ(体力的に)

あつもちろん分かつてると思うけど、瞑想は精神力鍛える為やで

略?(HP・パラメータ・SP上限UP)

もちろん気力と魔力もね

・・・よう考えたらシツポ鍛えたほうがよかつたんじゃ・・・

まあいいや(フラグ)

上ふぎけんな、ブチ折ってやる

体育祭当日

朝

優菜「さて、行きますか」

悠「ああ」

控室

飯田「皆準備は出来てるか!?もうじき入場だ!!」

障子「コスチューム着たかったな」

尾白「公平期す為着用不可なんだよ」

轟「緑谷」

出久「轟くん・・・何？」

轟「客観的に見ても実力は俺の方が上だと思う」

出久「え!? うっうん・・・」

轟「お前オールマイトに目えかけられてるよな、別にそこ詮索するつもりはねえが・・・お前には勝つぞ」

上鳴「おお!? クラス最強が宣戦布告!!?」

切島「急にケンカ腰でどうした!? 直前にやめろって・・・」

轟「仲良しごっこじゃねえんだ何だって良いだろ」

出久「轟くんが何を思って僕に勝つって言ってるのか・・・は分からないけど・・・そりゃ君の方が上だよ・・・実力なんて大半の人に敵わないと思う・・・客観的に見ても・・・」

切島「緑谷もそーゆーネガティブな事言わねえほうが・・・」

出久「でも・・・!! みんな・・・他の科の人も本気でトップを狙ってるんだ、僕だって・・・遅れを取るわけにはいかないんだ・・・僕も本気で、獲りに行く!」

轟「・・・おお」

優菜「さ、入場だ」

マスコミ「一年ステージ、生徒の入場だ!!」

プレゼントマイク「雄英体育祭!! ヒーローの卵たちが我こそはとシノギを削る年に一度の大バトル!! どうさせてめーらアレだろこいつらだろ!!? ヴィランの襲撃を受けたにも拘わらず鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!! ヒーロー科!! 一年!! A組だろおお!!?」

出久「わあああ・・・人がすごい・・・」

飯田「大人数に見られる中で最大のパフォーマンスを発揮できるか・・・! これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なんだな」

切島「めっちゃ持ち上げられてんな・・・なんか緊張すんな・・・! なア爆豪」

爆豪「しねえよただただアガるわ」

プレゼントマイク「B組に続いて普通科C・D・E組・・・!! サポー

ト科F・G・H組もきたぞー!! そして経営科・・・」

全クラス並んだ

ミッドナイト「選手宣誓!!」

ヒーロー1「おお!今年の1年主審は18禁ヒーロー」ミッドナイト「か!」

ヒーロー2「校長は?」

ヒーロー3「校長は例年3年ステージだよ」

常闇「18禁なのに高校にいてもいいものか」

峰田「いい」

ミッドナイト「静かにしなさい!!選手代表!!1—A中村優菜!!」

行きますか

出久「えっ優菜さん?」

瀬呂「そういやあいつ入試一位通過だったな」

B組女子「ヒーロー科の入試な」

押しのけて行くのしんどいんで飛んで行つた

トツ

優菜「宣誓・・・私が一位になる」

皆「えええええ!」

優菜「ていうのは嘘で、皆緊張してると思うけど深く考えたりすんな、やれない事はやれないそれは直ぐには変わらない!だからこそできることをやれ!体を鍛えろ!技を磨け!頭を使い!自分にとって一番大切なものは何だ!自分にとって一番大切な人は誰だ!それを守れるようになれ!イメージしろ、その自分の姿を!乗り越えろ今の自分を!失敗しても後悔するな、どうしてそうなったかを考え、実行しろ!恥じるな!誇りに思え、今の自分を!別に恥じの多い人生なんて珍しもんじゃない!大丈夫だ!ケガをしたらリハビリがールが治してくれる!ここには全力でできる舞台は整っている!今本気でやらなくていつやるんだ!見せてやろう私達の本気を日本中に!私は成績上一位だったが他のみんなを下に見てるわけじゃない、だから私は誰に対しても本気で行く・・・だからこそ本気でやろう!・・・最後に一言言わせてもらおう・・・さらに向こうへ!!!」

皆「プルスウルトラ!!!」

宣誓終わり

ああー恥ずかスワイー

ミッドナイト「さーてそれじゃあ早速第一種目行きましょう」

麗日「雄英って何でも早速だね」

ミッドナイト「いわゆる予選よ！毎年ここで多くの者が涙を飲むわ
!!さて運命の第一種目!!今年は・・・コレ!!」

障害物競走

出久「障害物競走・・・!」

ミッドナイト「計11クラスでの総当たりレースよ！コースはこの
スタジアムの外周約4KM！我が校は自由さが売り文句！ウフフ
フ・・・コースさえ守れば何をしたらって構わないわ！さあさあ位置に
つきまくりなさい・・・」

優菜「さあさあ来るぞー」

ミッドナイト「スターーーーート!!」

ビューン

飛んだ方が圧倒的に速い

轟が凍らせて動けなくなった奴がいるな

少し飛んで止まる

優菜「おいおいマジかよ」

プレゼントマイク「さあいきなり障害物だ!!まずは手始め・・・第

一関門口ボ・インフェルノ!!」

0ポイントヴィランがいつぱい

飛んでこうと思ったけど、邪魔してくるからちよつとイラつと来た

ハアアアアア

ダウン

超サイヤ人1だ

ギューン・・・ドン

ドガシヤアアア

気弾で消し飛ばした

他のやつは轟が凍らせたたり上から言ったり（俺行けなかったの

に・・・）して通って行った

また進む

すると

プレゼントマイク「オイオイ第一関門チョロいってよ!!んじや第二はどうさ!?落ちればアウト!!それが嫌なら這いずりな!!ザ・フオール!!」

うわー飛べなかつたらしんどかつたな

これも飛んで回避

プレゼントマイク「戦闘が一足抜けて下は団子状態!上位何名が通過するかは公表してねえから安心せずに突き進め!!そして早くも最終関門!!かくしてその実態は・・・一面地雷原!!怒りのアフガンだ!!地雷の位置はよく見りゃ分かる仕様になつてんどぞ!!目と脚酷使しろ!!ちなみに地雷!威力は大したことねえが、音と見た目は派手だから失禁必至だぜ!」

いや・・・これ全部飛ぶだけでいいやん

もちろん飛んだ

ギューン

どうせだから本気で飛んだら二秒でゴール前に・・・

待つとこ

ドオオオオオオオオオ

プレゼントマイク「後方で大爆発!!?なんだあの威力!?偶然か故意かー!ー!ーA組緑谷爆風で猛追ー!?!?つーか!!!抜いたああああー!!!」

ボオオオオオ

プレゼントマイク「緑谷間髪入れず後続妨害!!なんと地雷原則クリア!!イレイザーヘッドお前のクラスすげえな!!どういう教育してんだ!」

優菜「来たかデク」

出久「優菜さん・・・!」

優菜「行っていいぜ」

出久「えっでも」

優菜「いいから」

出久の3M後ろを走る

プレゼントマイク「さアさア序盤の展開から誰が予想できた!? 今一番にスタジアムへ還って来た、その男！．．．緑谷出久の存在を!!」

うおおお!!

二位かゝみみたいな顔して入る

優菜「やったじゃないかデク！」

出久「いや、それは優菜さんが譲ってくれたから．．．」

次々来たけど．．．常闇と悠いなくね？

あつ来た

43人目だった

予選通過は．．．42人

優菜「お前、何してたんだよ」

悠「最初のヴィランに潰されてた」

優菜「バカヤロー!!」

ゴツン

ギャーギャー騒いだ後

ミッドナイト「予選通過は上位42名!! 残念ながら落ちちやった人も安心しなさい! まだ見せ場は用意されてるわ!! そして次からいよいよ本選よ!! ここからは取材陣も白熱してくるよ! キバリなさい!!! さーて第二種目よ!! 私はもう知ってるけど．．．何かしら!!? 言ってるそばからコレよ!!!」

騎馬戦

上鳴「騎馬戦．．！」

峰田「騎馬戦．．！」

峰田は別の想像したな

蛙吹「個人競技じゃないけどどうやるのかしら」

ミッドナイト「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらおうわ! 基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど一つ違うのが．．．先ほどの結果に従い各自にポイントが振り当てられる事!」

砂籐「入試みてえなポイント稼ぎ方式かわかりやすいぜ」

葉隠「つまり組み合わせによって騎馬のポイントが違ってくると
!」

ミッドナイト「あんたら私がしやべってんのにすぐ言うね!!! ええそ
うよ!! そしてポイントは下から5ずつ! 42位が5ポイント41位
が10ポイント・・・といった具合よそして・・・1位に与えられるポイ
ントは1000万!!!!」

ダラダラダラダラ

出久「1000万?」

「ミッドナイト「上位の奴ほど狙われちゃう・・・下剋上サバイバ
ルよ!!!」

第六話

ミッドナイト「上を行く者にはさらなる受難を、雄英に在籍する以上何度でも聞かされるよ、これぞプルスウルトラ！予選通過一位の緑谷君!!持ちポイント1000万!!制限時間は15分振り当てられたポイントの合計が騎馬のポイントとなり騎手はそのポイント数が表示されたハチマキを装着！終了までにハチマキを奪い合い保持ポイントを競うのよ、取ったハチマキは首から上に巻くこと取りまくれば取りまくるほど管理が大変になるわよ！そして重要なのはハチマキを取られてもまた騎馬が崩れてもアウトにはならないってところ！」

百「てことは・・・」

砂籐「42名からなる騎馬10〜12組がずっとフィールドにいるってわけか・・・？」

青山「シンド☆」

芦戸「いったんポイント取られて身軽になっちゃうのもアリだね」
蛙吹「それは全体のポイントの分かれ方見ないと判断しかねるわ三奈ちゃん」

ミッドナイト「個性発動アリの残虐ファイト！でも・・・あくまで騎馬戦!!悪質な崩し目的での攻撃等はレッドカード！一発退場とします！それじゃこれより15分！チーム決めの交渉タイムスタートよ！」

切島「優菜！俺と組まねえか？」

優菜「え？」

切島「いや二位だからよ、最初から高いポイントでできるかなって」

優菜「お前は私よりもっと、いいヤツがいるぞ」

切島「いいヤツ？」

優菜「爆豪の馬に一番いるのはお前だろ」

切島「！確かにそうだ！行ってくる！」

その後何かと理由をつけて勧誘を回避

出久「君だ！」

優菜「え？」

出久「お願い！僕と騎馬を組んでくれ！」

優菜「・・・わかった、他は誰がいる？」

出久「麗日さんとサポート科の発目さんだよ」

優菜「私の役割は？」

出久「ペルソナで守ってほしい」

優菜「あくわかったやろう」

皆決め終わったみたい

プレゼントマイク「さア上げてけ鬨の声!!血で血を洗う雄英の合戦が今!!狼煙を上げる!!!」

出久「麗日さん!!」

麗日「っはい!!」

出久「発目さん!!」

発目「フッフ!!」

出久「優菜さん!!」

優菜「いっちよやりますか」

出久「よろしく!!」

プレゼントマイク「スタート！」

鉄哲「実質そのの争奪戦だ!!」

葉隠「はっはっは!!緑谷くんいったくよー!!」

優菜「まあ来るよな、逃げるんだろ？」

出久「もちろん!!」

骨抜「けっ・・・!!」

下が沼みたいになりだした！

コオオオオ

波紋で立っているが・・・

出久「沈んでる！あの人の個性か！麗日さん発目さん!!顔避けて

!!

同時に俺もジャンプ！

鉄哲「飛んだ!?サポート科のか！追ええ!!」

葉隠「耳郎ちゃん!!」

耳郎「わってる」

イヤホンジャックが飛んでくる！

優菜「イフリート！」

バシツ！

耳郎「何もいないのに何かいる！」

優菜「ヴィランの時に見ただろ？アイツ等だよ」

先に出しておいた

全員見せるか

バアアアアアアン

鉄哲「嘘だろ!?何体いるんだよ！」

出久「すごいよ！僕らに足りてなかった防御力・・・それを補って
余りある全方位中距離防御!!すごいや優菜さん！」

優菜「攻撃はしないからな皆」

麗日「着地するよ！」

ボワツ

発目「どうですかベイビー達は!!可愛いでしょう!?可愛いは作れる
んですよ!!」

出久「機動性バツチリ!すごいよベイビー!発目さん!!」

発目「でしょー!」

麗日「浮かしとるからやん・・・」

葉隠「私達も追うよ!さア次郎ちゃんリベンジ・・・」

砂籐「つーかおい!葉隠!!ハチマキねえぞ!!」

葉隠「はっ!!?いつの間に・・・!」

物間「漁夫の利」

プレゼントマイク「さくくまだ二分も経ってねえが早くも混戦混戦
!!各所でハチマキ奪い会い!!1000万を狙わず2位く4位狙いの
もって悪くねえ!!」

峰田「アハハハ!奪い会い・・・?違うぜこれは・・・一方的な略奪よ
お!!」

出久「障子くん!?アレ!?一人!?騎馬戦だよ!」

触手で峰田を覆ってるのか

優菜「いったん距離とろう」

ブニユ

ブニユ?

麗日「何!?取れへん!峰田君の!!一体どこから・・・」

峰田「ここからだよ緑谷あ・・・」

触手の間から投げたのか

出久「なアア!?それアライ!!?」

ミッドナイト「アリよ!」

シャツ

出久「わっ!!!?」

なんか飛んできたな

蛙吹「さすがね緑谷ちゃん・・・!」

出久「蛙吹さんもか!!すごいな障子君!!」

蛙吹「梅雨ちゃんと呼んで」

プレゼントマイク「峰田チーム圧倒的対格差を利用しまるで戦車だ

ぜ!

バシユ

麗日「あれ?峰田君の取れた!」

峰田の玉はクロノスに時間を加速させておいた

!!!

爆豪「調子乗ってんじゃねえぞクソが!」

優菜「カオス!」

ボオオン

爆豪「何だこいつ・・・」

ピタツ

プレゼントマイク「おおおお!!?騎馬から離れたぞ!?良いのかアレ

!!?」

瀬呂のテープで戻っていく

ミッドナイト「テクニカルなのでオツケー!!地面に足付いてたらダ

メだったけど!」

プレゼントマイク「やはり狙われまくる一位と猛追を仕掛けるA組

の面々共に実力者揃い!現在の保持ポイントはどうなってるのか・・・

7分経過した現在のランクを見てみよう！……あら!!?ちよつと待てよコレ……! A組緑谷以外パットしてねえ……つてか爆豪あれ……!!」

1 ? 緑谷チーム10000325P

2 ? 物間チーム1350P

3 ? 鉄哲チーム1125P

4 ? 拳籐チーム685P

5 ? 轟チーム615P

6 ? 鱗チーム195P

7 ? 爆豪チーム0P

8 ? 小大チーム0P

9 ? 角取チーム0P

10 ? 峰田チーム0P

11 ? 心操チーム0P

12 ? 葉隠チーム0P

物間「単純なんだよA組」

あつ爆豪取られてやんの

爆豪「んだてめエコラ返せ殺すぞ!!」

芦戸「やられた!」

物間「ミッドナイトが第一種目といった時点で予選段階から極端に数を減らすとは考えにくいと思わない? だからからおおよその目安を仮定しその順位以下にならないよう予選を走ってき、後方からライバルになる者たちの個性や性格を観察させてもらった、その場限りの優位に執着したって仕方ないだろう?」

切島「組ぐるみか……!」

物間「まあ全員の総意つてわけじゃないけど良い案だろ? 人参ぶら下げた馬みたいに仮初の頂点を狙うよりさ……あ、あとついでに君有名人だよな? 「ヘドロ事件」の被害者! 今度参考に聞かせてよ、年に一度ヴィランに襲われる気持ちってのをさ」

爆豪「切島……予定変更だ、デクの前にこいつら全員殺そう……

!!」

優菜「こつちからしたら一石二鳥だな」

出久「うん、逃げ切りがやりやす・・・」
ザッ

プレゼントマイク「ギア残り時間半分を切ったぞ!!」
出久「そう上手くは・・・行かないか」

轟「そろそろ、奪るぞ」

プレゼントマイク「B組隆盛の中果たしてー1000万ポイントは誰に頭を垂れるのか!!!」

優菜「イフリート、右手の部分代わりに持ってきてくれ」

カオスの空間に入れておいた銃を出す

出久「え？それって大丈夫なの!？」

優菜「これは自分に使う、デク気をつけろよ」

こめかみにあてる

パン

ブワッ

優菜「頼むぞ、この状況で使える奴!」

?「我は汝、汝は我」

優菜「ごめん、時間ないから省いて」

ミヅノハメ「・・・わかつたわ、私はミヅハノメ・・・奈良県にある神社の神様よ」

優菜「助かる」

百「いつも思ってたけど、ペルソナって増やせるんですか?」

優菜「まだ増やせるんじゃないの?多分」

イフリートから出久の脚を渡される

出久「時間はもう半分!足止めないでね!仕掛けてくるのは・・・」

轟「飯田、全身」

飯田「ああ!」

轟「八百万、ガードと伝導を準備」

百「ええ!」

轟「上鳴は・・・」

上鳴「良いよ分かってる!!しっかり防げよ・・・」

出久「一組だけじゃない!」

優菜「ミツハノメ！お前の力を見せてくれ！」

パキパキパキ

ビリリビリリ

無差別放電か！

だがこつちには！

出久「電気が来ない？そうか！氷は絶縁体だから！」

優菜「ホントにタイミングめちやくちやいな」

轟「残り6分弱後は引かねえ、悪いが我慢しろ」

障子「ぐっ!!？」

プレゼントマイク「何だ何した!?群がる騎馬を轟一蹴！」

相澤「上鳴の放電で確実に動きを止めてから凍らせた・流石とい

うか・・・障害物競走で結構な数に避けられたのを省みてるな」

プレゼントマイク「ナイス解説!!」

拳籐「あーハチマキ！くっそおお！」

轟「一応貰っとく」

出久「バックパックがイカレタ!!」

兎目「ベイビー!!!改善の余地アリ」

麗日「強すぎるよ！逃げきれへん！」

優菜「カオス！」

ズツ

板でガードされた

優菜「創造・・・！厄介だな」

増やしたと言っても状況は変わってない

五分後

プレゼントマイク「残り時間約一分!!轟フィールドをサシ仕様にし・・そしてあつちゅーまに1000万奪取!!!とか思ってたよ五分前までは!!緑谷何とこの狭い空間を五分間逃げ切っている!!」

優菜「そろそろ、しんどくなってきたぞ」

ずっと逆側について

氷を溶かそうとしたけど、すぐに近づかれて動かないといけなくなり真逆の位置まで行きまた凍らされるを繰り返してる

一気に溶かすと反動で近づいてしまう

飯田「皆、残り一分弱・・・この後俺は使えなくなる頼んだぞ」

轟「飯田？」

飯田「しつかり掴まっている、奪れよ轟くん！トルクオーバー！」

ドルルルルル

出久「は？」

嘘だろ!?取られた!?

皆（ペルソナ）が反応する前に取られた!!

プレゼントマイク「なー!!?何が起きた!!?速っ速ー!!」

轟「飯田！何だ今の・・・」

プレゼントマイク「飯田、そんな超加速があるんなら予選で見せろ

よー!!!」

飯田「トルクと回転数を無理やり上げ爆発力を生んだんだ、反動でしばらくするとエンストするがな、クラスメートにはまだ教えてない裏技さ」

プレゼントマイク「ライン際の攻防！その果てを制したのは・・・」

飯田「言つたる緑谷くん、君に挑戦すると!!」

プレゼントマイク「逆転!!轟が1000万!!そして緑谷急転直下の

0ポイント!!」

出久「突っ込んで!!」

麗日「よっしゃ！取り返そうデクくん!!絶対!!」

優菜「やってやろうじゃん・・・!!」

発目「正念場ですね・・・!!」

出久「皆・・・!!」

あと???.20秒

優菜皆は他のやつ取りに行け、念には念をだ。アリエルは透明になつてくれ」

出久が防御を崩して

出久???.ああ!!とった!!とったああ!!」

プレゼントマイク「残り17秒！こちらも怒りの奪還!!」

発目「待つて下さいそのハチマキ・・・違いませんか!？」

出久「やられた・・・!!」

飯田「轟くんすっかりしたまえ!!危なかったぞ!」

百「万が一に備えてハチマキの位置は変えてますわ!甘いですわ緑谷さん!」

アリエル「取ってきました」

優菜「ナイス」

百「取ってきた?」

轟「やられた!!」

優菜「甘いのはそっちじゃあないかな?これなくんだ」

10000325

さっきのは

『1000万のハチマキを取って来てくれ』って言ったんだ

出久「それって・・・!」

麗日「逃げよう!」

轟「上鳴!八百万!」

優菜「ミヅハノメ!」

電気はもう効かないよ

優菜「みんな戻って、守れ!」

プレゼントマイク「そろそろ時間だカウントいくぜエヴィバディセイハイ!10!9、8、7、6、5、4、3、2、1、タイムアップ!早速上位4チーム見てみようか!!おお!?1位の座を奪還!1位緑谷チーム!!2位爆豪チーム!!三位鉄て・・・アレエ!?オイ!!!心操チーム!!?4位轟チーム!!以上4組が最終種目へ・・・進出だああー!!」

出久「・・・」ドバーツ

優菜「そこまで泣かなくてもいいだろ・・・」

噴水かよ

プレゼントマイク「1時間ほど昼休憩挟んでから午後の部だけ!じゃあな!!!オイレイザーヘッド飯行こうぜ・・・!」

相澤「寝る」

プレゼントマイク「ヒュー」

鉄哲「：何が起きたんだ？いつの間にか0ポイントになって終わってたぞ・・・」

塩崎「あの小人の方のポイントけがらわしい取り方をしてしまった罰でしょうか・・・」

優菜「大丈夫だ、私の占いだがあんた（塩崎）とあんた（鉄哲）は本戦に出れる」

鉄哲「・・・それって当たるのか？」

優菜「信じないなら別にいいぞ」

蛙吹「悔しいわ三奈ちゃんおめでとう」

芦戸「爆豪、轟の氷対策で私入れてくれてただけで実力に見合ってるのかわかんないよ」

麗日「飯田君あんな超必持ってたのズルイや！」

飯田「ズルとはなんだ!!あれはただの謝った使用法だ！」

上鳴「ウエイイ（楽しかった）」

飯田「どうにも緑谷くんとは張り合いたくてな」

麗日「男のアレだなく・・・ていうかその緑谷くん、デク君はどこだ？」

優菜「なんか轟といたから喋ってるんじゃないの？」

その後の昼食

峰田「午後は女子全員あややって応援合戦しなきゃいけないだつて！」

百「聞いてないけど・・・」

峰田「信じねえのも勝手だけどよ・・・相澤先生からの言伝だからな」

「ということで、更衣室

百「全員分出しましたわ」

優菜「え？信じてんの？」

女子集まられて言われたから来たんだけど

優菜「フケていい？」

百「ダメです」

葉隠「やろう！」

優菜「わかった、わかったから……どうなっても知らないからな」
着替え中

麗日「あれ？そんなシツポ前ついてたっけ？」

優菜「ん？ヴィランの時には生えてたぞ」

麗日「あれ？そうだっけ？」

昼休憩終了

プレゼントマイク「最終種目発表の前に予選落ちの皆へ朗報だ！あくまで体育祭！ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してんのさ！本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ……ん？アリア？」

相澤「なーにやってんだ……？」

プレゼントマイク「どーしたA組!!！」

百「峰田さん上鳴さん!!騙しましたわね!!」

優菜「だから言ったじゃん」

百「何故こうも峰田さんの策略にハマってしまうの私……」

耳郎「アホだろアイツら……」

葉隠「まア本戦まで時間空くし張りつめててもシンドイしさ……

いいんじゃない!!? やったる!!」

蛙吹「透ちやん好きね」

プレゼントマイク「さアさア皆楽しく競えよレクリエーション！それが終われば最終種目、進出4チーム総勢16名からなるトーナメント形式!! 一対一のガチバトルだ!!」

切島「トーナメントか……！毎年テレビで見てた舞台に立つんだあ……！」

芦戸「去年トーナメントだっけ」

瀬呂「形式は違ったりするけど例年サシで競ってるよ」

ミッドナイト「それじゃあ組み合わせ決めのくじ引きしちゃうわよ組が決まったらレクリエーションを挟んで開始になります！レクに關して進出者は参加するもしないも個人の判断に任せるわ息抜きしたい人も温存したい人もいるしね、んじや一位チームから順に……」

尾白「あの……！すみません、俺辞退します」

出久「尾白くん！なんで．．!?せつかくプロに見てもらえる場なのに!!」

尾白「騎馬戦の記憶．．終盤ギリギリまでほぼボンヤリとしかいないんだ、多分奴の個性で．．チャンスの場だったのは分かってる、それをふいにするなんて愚かな事だったのも．．!」

出久「尾白くん．．」

尾白「でもさ！皆が力を出し合い争ってきた座なんだこんな．．こんなわけわかんないままそこに並ぶなんて．．俺は出来ない」

葉隠「気にしすぎだよ！本戦でちゃんと成果を出せばいいんだよ！」

芦戸「そんなん言ったら私だって全然だよ!」

尾白「違うんだ．．!俺のプライドの話さ．．俺が嫌なんだ、あと何で君らチアの格好してるんだ．．!」

庄田「僕も同様の理由から棄権したい！実力如何以前に．．何もしてない者が上がるのは、この体育祭の趣旨と相反するのではないだろうか!」

切島「なんだこいつら．．!!男らしいな!」

プレゼントマイク「なんか妙な事になってるが．．」

相澤「ここは主審ミッドナイトの采配がどうなるか．．」

ミッドナイト「そういう青臭い話はさア．．好み!!!庄田、尾白の危険を認めます!」

青山「僕はやるからね?」

ミッドナイト「繰り上がりは拳籐チームだけど．．」

拳籐「そういう話で来るんなら．．ほぼ動けなかった私らよりアレだよな?な?最後まで頑張って上位キープしてた、鉄哲チームじゃね?馴れ合いとかじゃなくてさフツーに」

鉄哲「お．．おめエらア!!!」

ミッドナイト「というわけで鉄哲と塩崎が繰り上がって16名!!組はこうなりました!」

優勝

上空を飛び、雄英の校章を雲でつくる

おお〜！

歓声上がる

葉隠「すっご〜い！」

優菜「私は着替えるぞ」

葉隠「後は任せて！」

耳郎「私も着替える」

着替えた

第七話

セメントス「オツケーもうほぼ完成」

プレゼントマイク「サンキューセメントス！ヘイガイズアアユウレデイ!?色々やってきましたが!!結局これだけガチンコ勝負!!頼れるのは己のみ!ヒーローでなくともそんな場面ばかりだ!わかるよな!!心・技・体に知恵意識!!総動員して駆け上がれ!!」

優菜「さつき聞いてた感じ、洗脳みたいな個性か?心操は」

尾白「多分」

優菜「デクヤバい気がする」

悠「なんか咄嗟に返しそう」

今まで悠忘れてたやつ・・・怒らないからこの小説評価して

プレゼントマイク「一回戦!!成績の割に何だその顔ヒーロー科緑谷出久!!対ごめんまだ目立つ活躍なし!普通科心操人使!!ルールは簡単!相手を場外に落とすか行動不能にするあとは「まいった」とか言わせても勝ちのガチンコだ!!ケガ上等!!こちとら我らがリカバリーガールが待機してっから!!道徳倫理は一旦捨ておけ!!だがまあもちろん命に関わるよーなのはクソだぜ!!アウト!ヒーローはヴィランを捕まえる為に拳を振るうのだ!」

心操「まいった・・・か、わかるかい緑谷出久これは心の強さを問われる戦い、強く思うビジョンがあるならなりふり構ってちやダメなんだ・・・」

プレゼントマイク「そんじや早速始めよか!!」

心操「あの猿はプライドがどうか言ってたけど」

プレゼントマイク「レディイイイイ」

心操「チャンスをつぶに捨てるなんてバカだと思わないか?」

プレゼントマイク「スタート!!」

出久「なんてこと言うんだ!!」

一歩だして固まった

心操「俺の勝ちだ」

尾白「ああ緑谷出久折角忠告したつてのに!!」

プレゼントマイク「オイオイどうした大事な初戦だ盛り上げてくれよ!? 緑谷開始早々ー完全停止!? アホ面でビクともしねえ!! 心操の個性か!!?」

麗日「デクくん・・!?」

悠「ほらやっぱり」

優菜「バカだ・・・本当バカ」

プレゼントマイク「全つつつ然目立ってなかったけど彼ひよつとしてやべえ奴なのか!!!」

相澤「だからあの入試は合理的じゃねえって言ったんだ」

プレゼントマイク「ん? 何?」

相澤「二人の簡単なデータだ個人戦になるからまとめて貰った、心操あいつヒーロー科実技試験で落ちてる、普通科も受けてたのを見ると想定済みだったんだろう、アイツの個性は相当に強力な物だがあので入試じゃそりやポイント稼げねえよ」

心操「お前は・・・恵まれてて良いよなア緑谷出久、振り向いてそのまま場外まで歩いていけ」

プレゼントマイク「ああー! 緑谷! ジュージュン!!」

優菜「しつかりしろ!! デク!!」

心操「分かんないだろうけど・・こんな個性でも夢見ちゃうんだよ、さア負けてくれ」

バキ

ブオツ

ワン・フォー・オールを暴発させたか

プレゼントマイク「これは・・・緑谷とどまったああ!!?」

尾白「すげえ・・・無茶を・・!」

心操「何で・・体の自由はきかないはずだ何したんだ!・・・!! 何とか言えよ・・・! 指動かすだけでそんな威力か羨ましいよ」

近づく

心操「俺はこんな個性のおかげでスタートから遅れちゃったよ、恵まれた人間にはわかんないだろ」

近づく

心操「逃え向きの個性に生まれて、望む場所へ行ける奴らにはよ!!」
掴む

心操「なんか言えよ!」

顔を殴られるが

出久「あああ!!!」

心操「押し出す気か? フザけたことを・・・!」

体制を崩そうと心操が手を出す

心操「お前が出るよ!!」

腕を掴んで

出久「んぬあああああ!!!」

一本背負い!

ダン

ミッドナイト「心操くん場外!! 緑谷くん二回戦進出!!」

プレゼントマイク「イヤハ! 初戦にしちや地味な戦いだったが!! とりあえず両者の健闘を称えてクラップユアハンズ!!」

少し空いて

プレゼントマイク「お待たせしました!! 続きましてはくこいつらだ! 優秀!! 優秀なのに拭いきれぬその地味さは何だ! ヒーロー科瀬呂

範太!! 対2位4位の同じくヒーロー科轟焦凍!! スタート!!」

瀬呂「まア・・・勝てる気はしねーんだけど・・・」

テープを轟にくつつける

瀬呂「つつて負ける気もしねー!!!」

プレゼントマイク「場外狙いの早技!! この選択はコレ最善じゃねえか!? 正直やっちまえ瀬呂ー!!!」

轟「悪いな」

!!!

やべえ!

気でこっち側全部に囲うように壁を作る

キイン

でかすぎだろ

スタジアムでてんぞ

瀬呂「やりすぎだろ・・・」

ミッドナイト「・・・瀬呂くん・・・動ける?」

瀬呂「動けるはずないでしょ・・・痛ええ・・・」

ミッドナイト「瀬呂くん行動不能!!」

ど、どんまい

どんまい

どんまい

どんまい

悠「こつち来ないようになんか張っただろ」

優菜「なんかやるなと思ったから」

飯田「だから氷が直角になつてるのか」

ミッドナイト「轟くん2回戦進出!!」

プレゼントマイク「ステージを乾かして次の対決!! B組からの刺客

!!綺麗なアレにはトゲがある!? 塩崎茨! 対スパーキングキリング

ボーイ! 上鳴電気!!」

塩崎「申し立て失礼いたします、資格とはどういう事でしょう私は

ただ勝利を目指しここまで来ただけであり・・・」

プレゼントマイク「ごつごめん!!」

上鳴「B組にもこういう感じいるのね」

プレゼントマイク「すつスタート!!」

上鳴「体育祭終わったら飯とかどうよ? 俺でよけりや慰めるよ、多

分この勝負一瞬で終わっから」

プレゼントマイク「瞬殺!!」

上鳴「ウエ・・・」

プレゼントマイク「あえてもう一度言おう! 瞬・殺!!!」

ミッドナイト「2回戦進出塩崎さん!」

塩崎「ああ・・・与えられたチャンス無駄にせずに済みました・・・」

悠「切り離しが厄介だったな壁針に拘束・・・上鳴の個性が完封され

た」

切島「相性があるからなアそんな中で上手く立ち回ればまた良かった」

たが・・」

障子「焦ってぶっぱなしだったな・・・」

麗日「・・・!ん?」

出久「上鳴君の個性も強力なハズだけど・・塩崎さんは入試で4位の実力者・・ツルかシンリンカムイと同じ様なものかなやっぱり拘束系は強いなあ破られてるのあまり見ないしあの無数のツルを避けつつ間合いを詰めるのは無理だから拘束を引きちぎったりとか力任せな対策しかないけど・・ああでもそれをさせない為にまず手を縛りにくるよなうーん・・」ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ

麗日「終わってすぐなのに先見越して対策考えてんだ?」

出久「ああ!?!いや!?!一応・・ていうかコレはほぼ趣味というか・・せつかくクラス外の凄い個性見れる機会だし・・あ!そうそうA組の皆のもちよこちよこまとめてるんだ麗日さんのゼログラビティも」

麗日「デクくん会った時から凄いけど・・体育祭で改めてやっぱ・・やるなアって感じだ」

プレゼントマイク「キアーどんどん行くぞ頂点目指して突っ走れ!!」

飯田「ザ・中堅って感じ!?!ヒーロー科飯田天哉!対サポートアイテムでフル装備!!サポート科発目明!!」

どんな戦いになるんだ・・・?

ざわざわ

っーか何だアリヤ・・・

飯田もサポートアイテムフル装備じゃねえか!?

ミッドナイト「ヒーロー科の人間は原則そういうの禁止よ?ないと支障をきたす場合は事前に申請を」

飯田「は!!忘れておりました!!青山君もベルトを装着していたので良いものと・・!」

青山「彼は申請しています」

飯田「申し訳ありません!だがしかし!彼女のスポーツマンシップに心打たれたのです!!彼女はサポート科でありながら「ここまで来た

以上対等だと思おうし対等に戦いたい」と俺にアイテムを渡して来たのです！この気概を俺は！！無下に扱ってはならぬと思ったのです！」

ミッドナイト「青くっさ!!!」

プレゼントマイク「いいんかい・・・」

相澤「まア双方合意の上なら許容範囲内・・・でいいのか・・・？」

優菜「そろそろ行ってくる」

悠「負けたら鼻からスパゲティな」

優菜「やめれ」

ここから悠

プレゼントマイク「スタート!」

発目「素晴らしい加速じゃないですか飯田君!!」

プレゼントマイク「は?」

飯田「マイク?」

発目「普段よりも足が軽く上がりますか!?それもそのハズ!!そのレッグパーツが着用者の動きをフォローしているのです!そして私は「油圧式アタッチメントバー」で回避もラクラク!」

飯田「どういうつもりだ・・・」

発目「飯田君鮮やかな方向転換!!私の「オートパランサー」あつて

こそその動きです!」

プレゼントマイク「何コレ・・・」

相澤「売り込み根性たくましいな・・・」

10分後

発目「ふー・・・すべて余すことなく見ていただきました、もう思い残すことはありません!!」

ミッドナイト「発目さん場外!!飯田くん二回戦進出!!」

飯田「騙したなあああ!!!」

発目「すみません、貴方利用させてもらいました」

飯田「嫌いだああ君ー!!」

出久「きつと飯田君真面目すぎたから耳障りのいいことと言って乗せたんだ・・・あけすけなだけじゃない目的の為なら手段選ばない人だ」
麗日「っし・・・そろそろ控室行ってくるね」

優菜へ

芦戸が勝ったか

行こう

プレゼントマイク「2位1位と来てここで負けたら恥だぞ!?中村優菜!!対騎馬戦では

結構活躍してたぞ!八百万百!!」

優菜「さっやるか」

百「ええ」

プレゼントマイク「スタート!!」

ダウン

超サイヤ人1

優菜「か・・め・・は・・め・・」

百「ハッ!」

機動隊かなんかの盾出してきた

優菜「波ーっ!」

ドオオオオオオオ

ズザザザザザ

百「クツ・・!」

押すだけ・・押すだけ・・

ミッドナイト「八百万さん場外!!中村さん二回戦進出!!」

百「押されきってしまいましたわ」

スツ

戻った

優菜「終わってまた会おう」

百「ええ」

戻ったら一回戦終わってたみたい

切島と鉄哲は切島、麗日と爆豪は爆豪

二回戦が始まる

プレゼントマイク「今回の体育祭両者トップクラスの成績!!まさしく

両雄並び立ち今!!緑谷対轟!!スタート!!」

しよっぱなから氷が出久に迫る

ブオツ

自損覚悟の打ち消し!!

プレゼントマイク「おオオオ!! 破ったああ!!」
またやるが

バキヤ

プレゼントマイク「まーた破ったあ!!!」

パキパキ

バコオ

耐久戦にしようにもきついだろ

もう一回

ドゴオ

プレゼントマイク「轟緑谷のパワーにひるむことなく近接へ!!」

氷でへ向きに道を作り

直接氷結で殴りに行った

避けるが右足が少し氷つく

左手を犠牲に吹き飛ばす

轟「・・・さつきよりずいぶん高威力だな、近づくなっか・・・

守って逃げるだけでボロボロじゃねえか」

もうそこらのプロ以上だよアレ・・・

さすがはNO2の息子って感じだ

轟「悪かったな、ありがとう緑谷おかげで・・・奴の顔が曇った、その両手じゃもう戦いにならねえだろおわりにしよう」

プレゼントマイク「圧倒的に攻め続けた轟!!とどめの氷結をー・・・」

出久「どこ見てるんだ・・・!」

バキヤ

壊れた指でまた吹っ飛ばす

轟「てめエ・・・何でそこまで・・・」

出久「震えてるよ、轟くん個性だっけ身体機能の一つだ、君自身冷気に耐えられる程度があるんだろう・・・!?でそれって左側の熱を使えば解決できるもん何じゃないのか・・・?・・・っ!!皆・・・本気でやってる、勝って・・・目標に近づくために・・・っ一番になる為に!半分の

力で勝つ!?まだ僕は君に傷一つつけられちやいないぞ!全力でかかって来い!!」

轟「何の…つもりだ、全力…?クソ親父に金でも握らされたか…?イラつくな…!」

二人とも突っ込み

ズゴツ

ドドドドドドドド

プレゼントマイク「モロだあー生々しいの入ったあ!!」

轟に…一発入れやがった!!

どう見ても緑谷のほうがボロボロなのに…

ここで攻勢に出るなんて…!

パキパキ

出久「氷の勢いも弱まってる」

壊れてる右手の親指でまた…

ビッ

轟「何でそこまで…」

出久「期待に応えたいんだ…!笑って答えられるような…カッ
コいい人に…なりたいたんだ、だから全力で!やってんだ皆!君の
境遇も君の決心も僕なんかには計り知れるもんじゃない…でも…
全力も出さないうで一番になって完全否定なんてふざけるなって今は
思ってる」

轟「うるせえ…」

出久「だから…僕が勝つ!!君を超えてっ!!」

ドゴオ

轟「親父をー…」

出久「君の!力じゃないか!!!」

ゴオオオ

火…いや炎…いや業火!!

プレゼントマイク「これは…!?!」

飯田「使った…!」

轟「勝ちてえくせに…ちくしょう…敵に塩送る何てどつち

がふぎけてるって話だ・・・俺だってヒーローに・・・!!」

エンデヴァー「焦凍オオオ!! やつと己を受け入れたか!! そうだ!! 良いぞ!! ここからがお前の始まり!! 俺の血をもって俺を超えて行き・・・オレの野望をお前が果たせ!!」

プレゼントマイク「エンデヴァーさん急に激励・・・か? 親バカなのね」

出久「凄・・・」

轟「何笑ってるんだよ、その怪我で・・・この状況でお前・・・イカれてるよ、どうなっても知らねえぞ

下に氷を張りながら轟が近づく

セメントス「ミッドナイト!」

同時に出久が飛び、突っ込む

真ん中にセメントが何本も立つ

轟「緑谷、ありがとうな」

優菜「カオス! 線の中の空間から衝撃を外に出すな!

バコオオオオオオオオン

ゴオオオオオオオ

耐えきれんか!

セメントス「威力が大きけりや良いってもんじゃないけど・・・すごいな・・・」

プレゼントマイク「何今の・・・お前のクラスなんなの・・・」

相澤「散々冷やされた空気が瞬間的に熱され膨張したんだ」

プレゼントマイク「それでこの爆風でどれだけ高熱だよ! ったく何も見えねーオイこれ勝負はどうなって・・・」

ズリ

どっちだ!?

ズルズルズル

ミッドナイト「緑谷くん・・・場外、轟くん・・・三回戦進出」

緑谷のやつ煽っというてやられちまったよ・・・

策があったわけでもなくただ挑発しただけ?

轟に勝ちたかったのか負けたかったのか・・・

なんにせよ恐ろしいパワーだけありや・・・
気迫は買う

騎馬戦までは面白いやつだと思っただがなア

優菜「やべえ！そろそろ行かねえと」

悠「負けたらデスソース一本な」

優菜「シヤレにならんからやめれ」

飯田が勝ったか・・・どうやって？レシプロか？

まあ後で考えよう

プレゼントマイク「さあ次は今回大注目のこいつだ！今度も一瞬か
!! 中村優菜!! 対酸危険すぎやしねえか？今回は使うのか！芦戸三奈
!!」

芦戸「私が勝つからね」

優菜「負けんよ」

ハアアアアア

ドウン

バチバチバチ

超サイヤ人2

優菜「いくぞ」

ザッ

プレゼントマイク「スタート!!」

芦戸「おりゃー!!」

ドブツ

うわっ！酸!!

プレゼントマイク「早速使ったー!! どうする!?!」

コオオオオ

ベチャ

プレゼントマイク「まともだったあー!!!」

頼む！はじけ！

バチバチ

芦戸「え!?!効いてない!?!」

プレゼントマイク「え!?!効いてないの!?!」

優菜「うおおお!!」

ダダダダ

グッ

軽めに殴った

ドゴオ

芦戸「ぐっ!!!」

優菜「あっ」

シュン

ミッドナイト「芦戸さん場外！中村さん三回戦進出!!」

優菜「すまん！やりすぎた!!」

芦戸「いや、大丈夫だよ」

ロボに連れてかれた

もう控室いよ

切島と爆轟は爆豪が勝ったか・・・じゃあ次爆豪か

轟と飯田は轟が勝った

やりますか

プレゼントマイク「さあここを勝てばとうとう決勝だ！まずは、ま

だ変身はあるのか!?中村優菜!!対一瞬で終わらないでほしい！爆豪

勝己!!」

爆豪「ぶっ殺す！」

優菜「それ私情だろ」

プレゼントマイク「スタート!!」

爆豪「オラアア！」

ボオム

プレゼントマイク「早速行ったあ!!今度は効いたか!？」

ガシッ

爆豪「なっ!？」

優菜「変身するの待てよ」

振りほどく

爆豪「くそっ!!死ねや!!」

ボンボンボオオオン

ゴゴゴゴゴゴ

プレゼントマイク「何だ!?地震か!?」
ドウン

ヒューヒューヒュー

超サイヤ人3

優菜「やるか」

爆豪「俺は最後まで行かなくても勝てるってかあ?クソが!!」

優菜「最後まで行ってほしいか?」

爆豪「ああ!?俺は本気でやりあつた上で完膚なきまでに勝ちてえんだよ!!やる気がねえならさっさと負けやがれ!!」

優菜「よし、わかった少し待ってろ」

ハアアアアア

ピカーツ

爆豪「ウグツ!」

プレゼントマイク「おわっ!眩しっ!」

優菜「これだろ?」

爆豪「そうだ、行くぞ!」

ダッ

ダッ

顔を同時に殴る

ボオオオン

殴つたと同時に爆発させられる

爆豪「やっ和本気でやれる!!」

優菜「一回でやられるかってんだ!」

爆豪「そう来なくちゃ面白くねえ!」

シュツ

一瞬で頭に蹴り入れようとするが
ガッ

優菜「何!?!」

爆豪「なめてんじやねえぞクソが!!」

ぐーーんぐーーんぐーんぐんぐんぐんぐん

何回も回すな！

やべっ吐きそう

爆豪「オラア!!」

真上に投げ飛ばす

そして落ちる

爆豪「死ね!!」

爆豪がひねりを加え真上に飛ぶ

そして当たる瞬間に

ハウザーインパクト!!

プレゼントマイク「麗日戦で見た特大火力に勢いと回転を加えまさに人間手榴弾!!優菜さすがにこれは効いたか!」

優菜「結構危なかった・・・」

降りた爆豪の後ろに立つ

爆豪「クソツ」

自分で割った地面の石を掴み

投げてくる

なら俺もやってやる

優菜「ファイナル・・・か」

避ける

優菜「め」

ずっと避ける

優菜「は」

爆豪「クソツなら・・・一点集中だ!!」

あれ?そんなんできたっけ・・・ペルソナでもなったたしいいか

優菜「め」

ゴオオオオオオ

言った通りまっすぐ爆発が来た

気弾を爆発の上に乗せ滑りながら近づくと(詳しくはケフラVS悟空

へ)

目の前にまで行く

爆豪「な!!」

優菜「波ー!!!」

反射神経でかめはめ波に向かって打ち続ける

爆豪「負けてたまるかー!!」

優菜「グググ・・・10倍だー!!!」

ドオオオオオオ

爆豪「グアアアア!!!」

バゴオ

ミッドナイト「爆豪くん場外!これで決勝は轟くんと中村さんに決定!!」

決勝戦

プレゼントマイク「さアいよいよラスト!!雄英1年の頂点がここで決まる!!決勝戦!!轟対中村!!今!!スタート!!」

ズア

キイイン

やべっ!凍らされた

プレゼントマイク「いきなりかましたあ!!中村との接近戦を嫌がったか!!早速優勝者決定か!」

波紋で行くか?いやイフリーストの炎で・・・

ボツ

これは・・・

プレゼントマイク「ん?本当に終わりか?クリーンヒットしちまったか?」

バリバリバリ

サアアアア

プレゼントマイク「何だ!?氷が溶けた!?いや、砂みたいになくなったぞ!」

優菜「トラウイiscalパンテクター(略、トラ)・・・だっけ?お前これは強すぎ」

トラ「ダメだったか?」

優菜「いや、威力ヤバイよ。ものすごく使いにくい、戻って」

運よく・・・というか神様が手えまわしてたんだろう

パキパキパキ

優菜「イフリート！」

ゴオオオオオオ

轟「クツ!!」

優菜「何で左を使わないいいんだ？飯田戦はまだわかるが・・・」

轟「お前もそういうのか・・・」

優菜「出久にも・・・言われてたもんなア」

轟「聞こえていたのか」

優菜「なんで使わない」

プレゼントマイク「あれ？何を話し込んでるんだ？決勝戦なんだからバンバンやってくれよ！」

轟「・・・」

優菜「また逃げるのか？逃げる方が後からしんどいぜ」

轟「黙れ・・・」

優菜「何で使わない、ちゃんとした使い方が分からないなら、やればわかる!!やらなきゃ一生分からん!!」

轟「黙れ・・・！」

パキパキパキ

靴ごと凍る

バキ・・・バキ

氷を割って近づく

優菜「諦めたらそこで試合終了だぜ・・・？私だって、お前が今までどんな人生を送ってきたかなんて全く分からない。ハッキリ言うと、私はこの世界の間じゃない」

轟「・・・頭でもイカれたか？」

プレゼントマイク「何て言ってるんだ？」

優菜「最初は車にひかれて死んださ、中身も元は男だ。高ぶったりしたら一人称が俺に変わったりな、いわゆるいじめって言うんだが：大企業の社長の息子がよ、同じクラスにいたんだ。タバコ吸ってたよ、注意したんだよ、まあ逆切れされてそれからいじめだよ。机に落

書きはもちろん上履きに画鋏、トイレしてたらバケツを上から落とされたりした、一部始終録音したかな先生なんか気づいても無視する。その後社長の息がかかった教師に呼び出された、余計なことするなつてな。それも録音したが、その後トラックにひかれ死んだ。今でも思いつく、あの運転手の顔を・・・笑ってたよ」

轟「・・・!!!」

優菜「笑顔で俺を見てた、多分社長がやらせたんだろう。証拠隠滅の為に金でも積んで、まああ百年以上も前の事だがな」

轟「・・・何が言いたい」

優菜「どんな苦しみにも耐えろ、お前が男なら・・・男に生まれたんならな」

轟「・・・」

優菜「若いうちから手を抜くことなんて覚えるんじゃないまだガキなんだから後先考えず全力でやってりゃいいんだよ！今楽ばっかしてると大人になってから本気の出し方忘れちゃうぞ」

轟「っ!!」

パキパキパキ

また凍るが、

バキ、バキ

優菜「さつきよりも弱いぞ・・・迷ってるだろ、お前」

轟「・・・」

優菜「さしずめ・・・デクとやってから・・・自分がどうしたらいいか、正しいのかわからなくなったってことか？」

轟「・・・」

優菜「本当は分かってんだよ、お前は。分かっているくせに無視してる、無かったことにしようとしてる。元はオヤジでも、今はお前の力だろうが。利用しちまえばいい、この世に絶対なんかねえ、けど心の中に絶対はある、それと同じだ。左も使って、本気でやれよ。使ってる時の顔が一番・・・いい顔してたぞ」

轟「!!!」

優菜「それでもやる気が出ねえなら・・・仕方ねえ」

ピカーッ

ハアアアアア

グググ

超サイヤ人4フルパワー!!

轟「クソツ!!」

ゴオオオオオオ

優菜「決心したか!!」

轟「もう・・・親父なんかどうでもいい・・・どうやってでもお前に勝ってやる!!」

プレゼントマイク「ようやく、始まるか!」

轟「うおおお!!」

優菜「なら俺も、本気でやってやる」

カオスの力で怪盗服になりパワーを上げる

コオオオオ

波紋で力を上げる

ボツ

優菜「皆には言ってなかったが、魔法がつかえるんだよ、俺は」

バリバリバリ

なんかすごい事になってる

ゴオオオオオオ

パキパキパキ

思いつきり轟に飛び右腕で氷を殴りながら・・・火を消した!?

プレゼントマイク「行ったー!!!」

ドゴオオ

優菜「緋色の波紋疾走!!!」

ゴゴゴゴゴゴゴ

パキパキパキ

止まる

ギリギリ出なかったか!?

ミッドナイト「轟くん場外!!よって・・・中村さんの勝ち!!」

プレゼントマイク「以上で全ての競技が終了!!今年度雄英体育祭1

年優勝は・・・A組中村優菜!!!」

優菜「・・・」

表彰式

ミッドナイト「それではこれより!!表彰式に移ります!」

優菜「おいおい、爆豪しつかりしてくれよ」

爆豪「んゝんゝゝゝゝ!!」

セメントに縛られて、腕も使えず口もふさがってるって・・・

優菜「暴れるからだぞ」

ミッドナイト「3位には爆豪くんともう一人飯田くんがいるんだけど、ちよつとお家の事情で早退になっちゃったのでご了承くださいな。メダル授与よ!!今年メダルを贈呈するのはもちろんこの人!!」

オールマイト「私がメダルをもって来た」

ミッドナイト「我らがヒーローオールマイトオ
!!」

優菜「被ってるし」

今年の1年は良いなアオールマイトに見てもらえてんだよなー

オールマイト「爆豪少年!!つとこりやあんまりだ・・・」

口についてたのを外す

爆豪「オールマイトオ3番なんて、何の価値もねえんだよ、世間が認めても俺が認めなきゃゴミなんだよ!!」

オールマイト「うむ! 相対評価に晒され続けるこの世界で不変の絶対評価を持ち続けられる人間はそう多くない、受け取つとけよ! 傷として! 忘れぬよう!」

爆豪「要らねつつつてんだろが!!」

首にかけようとするが、拒否してあがくので口にかけた

オールマイト「轟少年、おめでどう」

首にかける

オールマイト「決勝で左側を納めてしまったにはワケがあるのかな」

轟「緑谷戦でキツカケをもらって・・・わからなくなっちゃいました、貴方が奴を気にかけるのも少しわかった気がします。俺もあな

たのようなヒーローになりたかった、ただ……俺だけが吹っ切れてそれで終わりじゃ駄目だと思った、清算しなきゃならないモノがまだある」

オールマイト「……顔が以前と全然違う、深くは聞くまいよ、今の君ならきつと精算できる」

こっちに来る

オールマイト「優菜くんおめでとう、よく頑張ったよ」

優菜「ありがとうございます……オールマイトちよつと耳貸して」

オールマイト「耳かい？」

優菜「この後お疲れさまでしたって言うつもりだったでしょ」

オールマイト「そうだが」

優菜「プルスウルトラって行った方がいいですよ」

オールマイト「……マジで？」

優菜「マジで」

オールマイト「さア!!今回は彼らだった!!しかし皆さん!この場の誰にもここに立つ可能性はあつた!!ご覧いただいた通りだ!競い!高め合い!さらに先へと昇っていく姿!!次代のヒーローは確実にその目を伸ばしている!!てな感じで最後に一言!!皆さんご唱和ください!!せーの」

プルスウルトラ!!!

オールマイトがこっちを向く

グッ

グッドマーク

グッ

返した

教室「お疲れつつうことで明日明後日は休校だ、プロからの指名等をこっちでまとめて休み明けに発表する、ドキドキしながらしっかり休んどけ」

その日は帰って二人でベッドにぶっ倒れた(寝た)